

矢作の山車

# 神魂をく



# やはぎ だし 矢作の山車

## 《目次》

- たましい 魂をひく…………… P 3
- だし 山車とは…………… P12
- にしなかのきれだし 西中乃切山車…………… P17
- ひがしなかのきれだし 東中之切山車…………… P33
- ちようこくし せがわじ すけしげさだ せがわじ すけしげみつ 彫刻師 瀬川治助重定・瀬川治助重光…………… P49
- ほか ちいき かつやく だし 他の地域で活躍する山車…………… P51
- きろく なか だし 記録の中の「やはぎの山車」…………… P55
- やはぎ まちのれきし ひもと 矢作のまち まちの歴史を紐解く…………… P57
- やはぎ おそ すいがい 矢作のまちを襲う水害…………… P61
- やはぎ だし ひ つづ いぎ 矢作の山車を曳き続ける意義…………… P67
- だし ほかん 山車の保管…………… P70
- で あ きすな こうせい つた おも 出会い・絆、そして後世へ伝えたい思い…………… P79

# 神ひく

だし まつ かつ  
山車は祭りに担がれ、  
ひ やたい  
曳かれる屋台。

かみさま  
神様をのせてひく。  
わざわ ふく  
災いを福に変えるためにひく。  
ひとびと ねが  
人々の願いをひく。  
きずな  
絆をひく。

これからも山車は  
ひとびと さまざま おも たましい の  
人々の様々な思いや魂を乗せ、  
つぎ せだい  
次の世代へと  
ひ つ  
引き継がれていきます。



かつて矢作には四つの山車があり、  
矢作神社の祭礼時に競っていた。

矢作のまちにはかつて「東之切」「東中之切」「西中乃切※」「西之切」と4つの区域(今の一区から四区)にわかれ、それぞれに山車があり、全部で4台ありました。  
矢作神社の祭礼時には、山車を組み

たて、まち曳き、宮入りを競ったようです。  
現在は二区と三区の山車が存在し、他の2つの山車は別の場所で活躍しています。

※：西中乃切の「乃」は、山車本体の表記に合わせています。

【東中之切山車】

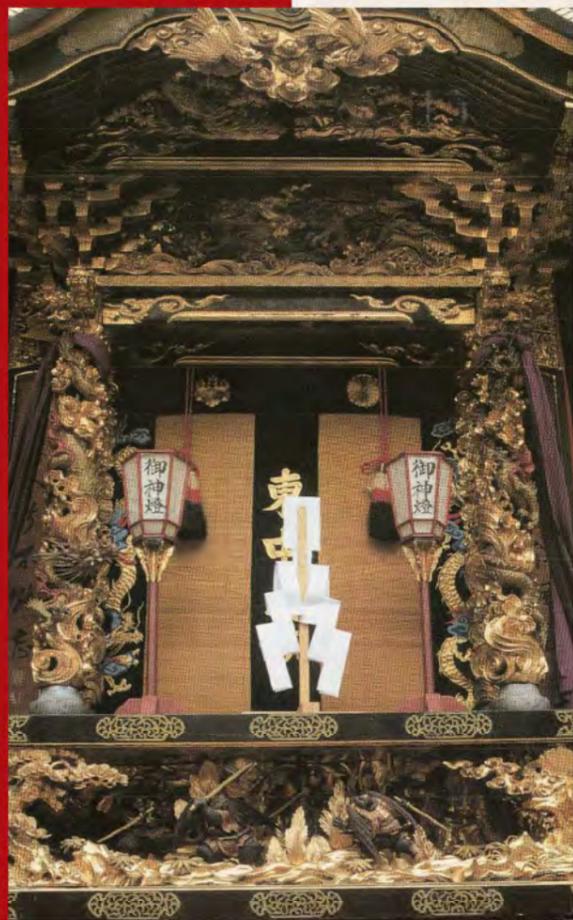
【西中乃切山車】

東中之切の山車は、江戸時代末期に素木にて造られ、その後数回の改造を経て現在の形で完成しました。保存活動は祭り組『東中之切組』にておこなわれ、保管場所も矢作神社境内であったため、戦時下でも被害を受けることなく、建造当時のまま、いまに至ります。昭和48年（1973年）に岡崎市の有形民俗文化財として指定され、現在も矢

作町二区の町民により保存活動がおこなわれています。平成17年（2005年）の愛知万博のイベント『あいち山車・からくり総揃え』には、総勢百両の中に三区山車『西中乃切』とともに展示されました。総重量は3t、間口は約3.08m、奥行は約4.07m。高さは山を上げた時、約6.63mになります。

西中乃切の山車は、江戸時代末期、天保10年（1839年）に岡崎市材木町の宮大工、大山荘八を惣頭領とする職人たちにより作られました。総重量は3t、間口は約2.4m、奥行は約4.1m。高さは約6.3mから4.5mまで4段階に高さ調整ができます。昭和19年（1944年）7月19日、矢作のまちは空襲の被害を受けました。公会堂

に置いてあった胴柄と車輪は、焼夷弾の空襲で焼けてしまいました。しかし、この山車の宝ともいえる彫刻や水引幕などは分解して額田の桜井寺に疎開されており、奇跡的に難を逃れました。おかげで戦後新たに胴柄を作り直し、山車は復活することができました。昭和43年（1968年）に岡崎市の有形民俗文化財に指定されました。



どちらの山車も彫刻や水引幕が素晴らしく、絢爛豪華です。特に彫刻は瀬川治助と呼ばれる親子3代にわたる世襲の彫刻師の作品です。

東中之切の山車は、矢作村八幡社の祭礼山車として、文化11年（1814年）に素木で造られ、文政2年（1819年）に塗上げと彩色が施された後、さらに天保11年（1840年）に上山の建造と漆塗りが施され文久元年（1861年）に前山と彫刻飾りを含む大掛かりな改造がおこなわれました。彫刻は瀬川治助重光が担当し、壇箱、欄間 および、前山にある彫物を



手掛けました。この山車の飾幕としては、文政11年（1828年）に胴山を覆う真っ赤な大幕がつけられ、さらに安政2年（1855年）に上山のまわりを飾る奥村石蘭画による水引幕がつけられ、明治3年（1870年）上山の天井には鈴木寿山による龍神図が、側面と後面には飾り襖がつけられ、絢爛豪華な姿となりました。平成26年（2014年）3月16日に、3代目となる新しい水引幕に作り替えることができ、岡崎市長を招き盛大な完成披露式を開催しました。



西中乃切の山車は、矢作村弥五騰社の祭礼山車として、江戸時代末期、天保10年（1839年）に建造され、矢作神社祭礼においては他の3両の山車とともに、競ってまち曳きがおこなわれていました。この山車は正面に唐破風屋根を二重につくり、鬼板・懸魚・桁の上下・高欄に、金箔を押した彫刻飾りをはめています。鬼板は「楠木正成正行親子の桜井の別れ」、破風は黒塗りに菊・桐の金具をつけ、懸魚は「三羽の鶴」、欄間と壇箱には、「雲水一匹龍」が上下対となっています。4本の伊達柱は「竹に虎」の透かし彫りで、外側の脇障子は「獅子の干尋の谷落とし」が左右対となっています。



壇箱の左右には力士像が伊達柱を支えています。これらのみごとな彫刻は、瀬川治助重貞によるものです。山車の両側と背面には猩々緋色の幕が張られ、水引幕には、黒地のビロードに「龍と波」が金銀糸で刺繍され、龍の目にはガラス玉をはめ、牙や爪には銀板が貼られており、これもまたみごとです。日本全国どこにだしても引けをとらない絢爛豪華な矢作の山車。なぜこのような立派な山車が矢作のまちにあるのか。実はよくわかっていません。

この2つの山車は、一度直に見てみる価値は十分にあります。



まち曳きでは、山車の動きに合わせて、異なった曲調が演奏されます。矢作神社の祭礼である10月2日に行われていましたが、時代がたつにつれ、山車曳きに必要な若者や子供たちが集まらず、10月2日が土曜日か日曜日になる時だけ曳くようになりました。西中乃切の記録によると山車の曳行

は、昭和48年・49年から16年あけて、平成2年・5年・7年・11年、そこから11年あけて平成22年といった具合でした。山車の仕組みや曳き廻し、お囃子など、伝統文化の継承が難しくなる中、平成22年に山車保存会が結成されて以後、平成25年と、岡崎市政100周年の平成28年・30年と

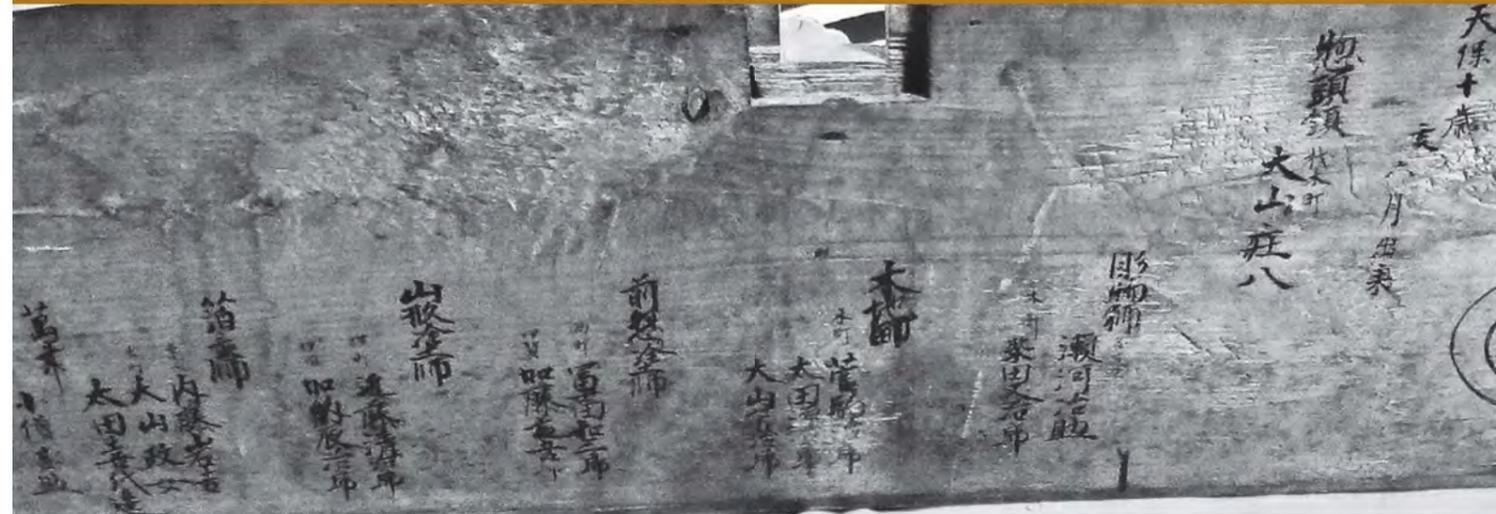
今後は隔年で曳くことにしました。先の修復にあわせ、山車を改造し、念願の名鉄線を横断して曳き廻すことも可能になり、名鉄線の南に住む人たちにもお披露目することができました。今後も多くの方にこのすばらしい山車の存在を知っていただき、誇りに思っ

てほしいと考えています。特に若い人たちが今後も引き継いでくれることを期待しています。そしていつまでも矢作のまちのシンボルとして大切にしていきたいと願っています。



# 山車とは

矢作の山車の彫刻と水引幕 / 矢作のまちについて



天保十歳  
亥六月出采

物頭領 材木町  
大山庄八

彫刻師 名古屋  
瀬河治助

木町 柴田又治郎

木地師  
木町 菅野治郎  
太田源治郎  
大山芳治郎

前懸塗師  
西町 富士田和二郎  
伊賀 加藤藤吉郎

山形塗師  
横所 近藤清治郎  
伊田 加納辰治郎

箱置師  
連尺 内藤若吉  
木町 大山正女  
太田喜代造

萬筆 小僧助助

# 山車は、神様ののりもの。



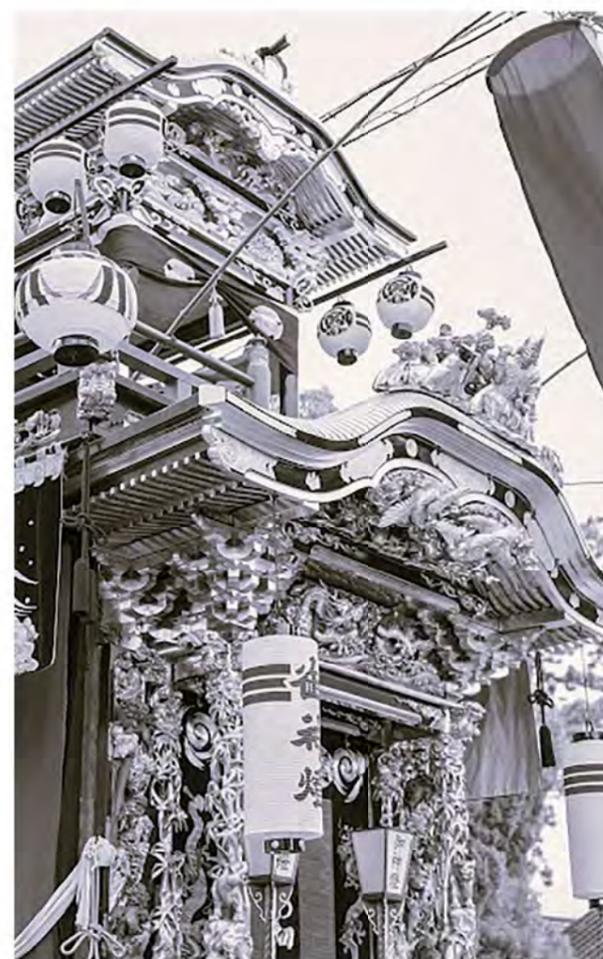
## 山車の歴史

平安時代の貞観11年(869年)、都をはじめ全国に疫病が流行したときに、神輿をかついで病気がなくなるように祈ったという記録があり、南北朝時代の応仁元年(1467年)には、山鉾の曳き廻しがおこなわれたという記録があります。

山車は災いの除去を図るのが目的の移動神座であるともいえます。

山車は日本だけではなく、多くの国々でも担ぎ出されています。人間の世界に降りて来られた神様をみんなで担いだり、車に乗せ曳き廻し、災いを福と変えるという考えはどの宗教にもあります。

ネパールの仏教まつり、キリストのカーニバル、イスラムのモハラム祭りなどでも、巨大な車をまちなかで曳き廻します。



## 山車とは

「山車」という言葉は、明治時代にできたといわれており、山車の語源は諸説あります。

屋台の鉾につけた竹籠の編み残し部分を垂れ下げて出してあり、その部分を「だし」と言ったことに由来しているとか、神を招き寄せるために外に出しておくことから「出し物」とする説などがあります。

また「山車」と書くのは当て字で、祭礼の時に神の降りる「依代」として小さな山を作っていたものが発展し、移動可能な車となったことから当てられたと考えられています。

関西では「壇尻」、「山」ともいわれています。

## 矢作の各地区の呼び名

慶応4年9月3日(1868年10月18日)に東京府が誕生しました。

明治2年(1869年)に天皇の東京滞在が発表されたことにより、矢作村祭り組の呼称は「上」が「西」に、「下」が「東」に改められて、東之切組、東中之切組、西中乃切組および西之切組となりました。





まちの変化を見守り、人々や西中乃切・東中之切の山車を守ってきた神社が矢作のまちにはあります。

矢作神社

矢作の総社である矢作神社の祭神は、通称「牛頭天王」といわれる「素戔鳴神（尊）」（須佐之男命）であり、人々は「天王さん」と呼んで親しんできました。昭和3年（1928年）に刊行された『矢作町誌』によれば、その由緒は315年頃の日本武尊による東夷征伐にさかのぼるとされます。日本武尊は、地元の民から賊の退治を依頼され、矢を作る職人である矢作部たちに矢を作るよう命じました。ですが、矢を作るための竹は川の中州に

あったためとりにいけませんでした。そこへ一匹の蝶が現れ、人の姿となり竹を切り取ってきました。矢作部たちはこの竹を用いて1万本の矢を作り、日本武尊は素戔鳴尊を祀り、賊を討ち果たしたと伝えられています。この矢竹の一部が矢作神社にある矢竹やぶで、この故事により「矢作神社」と呼ばれることになったといわれています。



▲ 矢作神社にある日本武尊陶像

八幡社

元は下馬八幡宮と称して現在の矢作町字羽城の地の田圃の中にありましたが、弘化2年（1846年）に水難を避けて矢作神社に近い現在地へ遷座されました。八幡社の社殿に江戸時代の矢作橋の西から2つ目の脚柱のものと伝えられる頂部および底部の部分が安置されていますが、これは矢作にあった別社だった柱口社の祭神天御柱神及び地御柱神を合祀したことによるものです。矢作町二区氏子の氏神様です。



彌五郎社

元は彌五郎殿と称しました。尾州津島神社（牛頭天王）の彌五郎殿を勧請したと思われます。信州浪合記に、「後村上院 正平元年堀田彌五郎正泰なるもの左太彦宮 並内大臣定経の霊を崇め奉りて祠を建つ時の人願主の名に因りて彌五郎殿という」とあります。明治初年現社名に改め、大正5年8月末社 野畑天神社諏訪社八柱子社を合祀しました。矢作町三区氏子の氏神様です。

※和田清美氏「矢作町界隈記」より  
(<http://dakiyo.web.fc2.com/>)

西中乃切

彫刻

西中乃切山車の彫刻

この山車は、特に彫刻が素晴らしく、さらに金箔が施されています。



鬼板は、南北朝時代、足利尊氏軍を迎え撃つため、決死の覚悟で楠木正成が

息子正行に別れを告げる「桜井の別れ」の場面です。



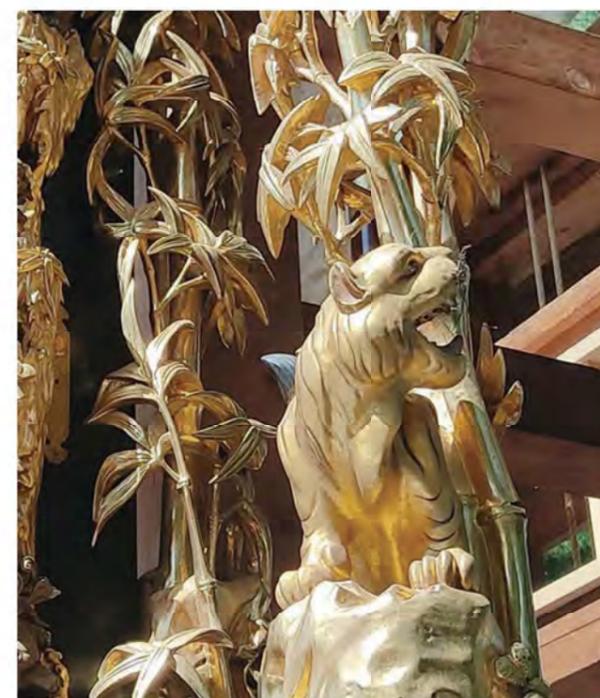
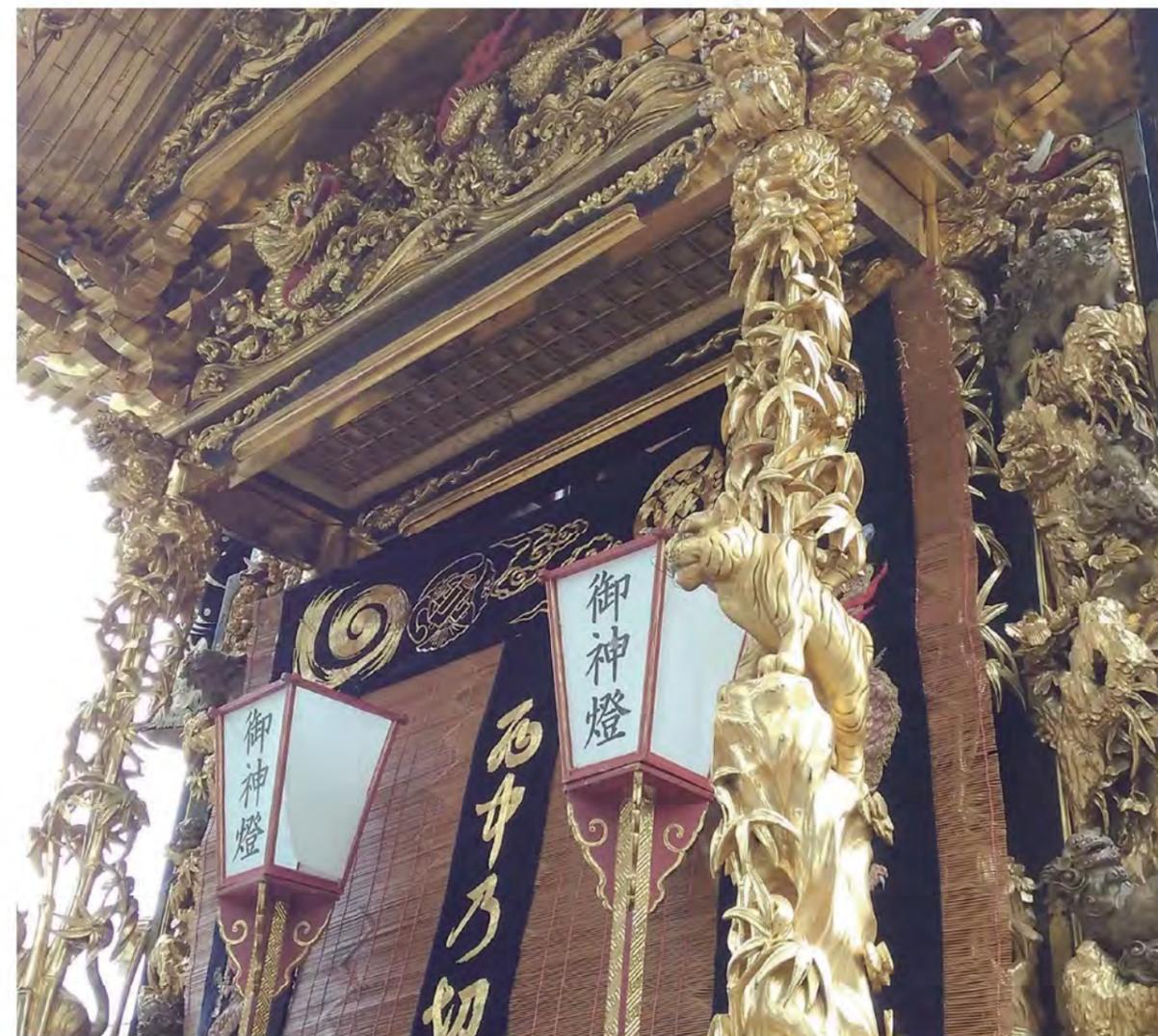
懸魚は「三羽の鶴」が彫られています。



おいかたは、「2匹の狛犬が蹴鞠とじゃれあう様」が彫られています。  
 普段は懸魚の「三羽の鶴」にかくれて見えません。



なかそなえは「雲水一匹龍」が彫られています。  
 壇箱の「雲水一匹龍」と左右対になっています。



伊達柱4本には「阿吽の虎と竹の透かし彫り」。  
 両側の脇障子は「獅子の千尋の谷落とし」が彫られ、右は親獅子が子を谷へ落とす様、左は子獅子がたくましく登る様が生き生きとみられます。



壇箱は「力神」と「雲水一匹龍」が彫られています。  
裏面には貴重な下絵も描かれています。

柱脇障子の下部には瀬川治助の作であることを示す刻印があります。

壇箱の裏面には、「雲水一匹龍」の下絵が描かれています。瀬川治助の下絵は、名古屋の空襲で焼けてしまっ  
て残っておらず、この彫刻の裏

に直接描かれたこの下絵が唯一の存在といわれており、大変貴重な資料となっています。



▲ 壇箱の裏面に描かれた貴重な下絵  
瀬川治助の下絵は名古屋の空襲で焼けてしまって残っておらず、これが唯一の存在といわれています。

西中乃切

水引幕



西中乃切山車の水引幕

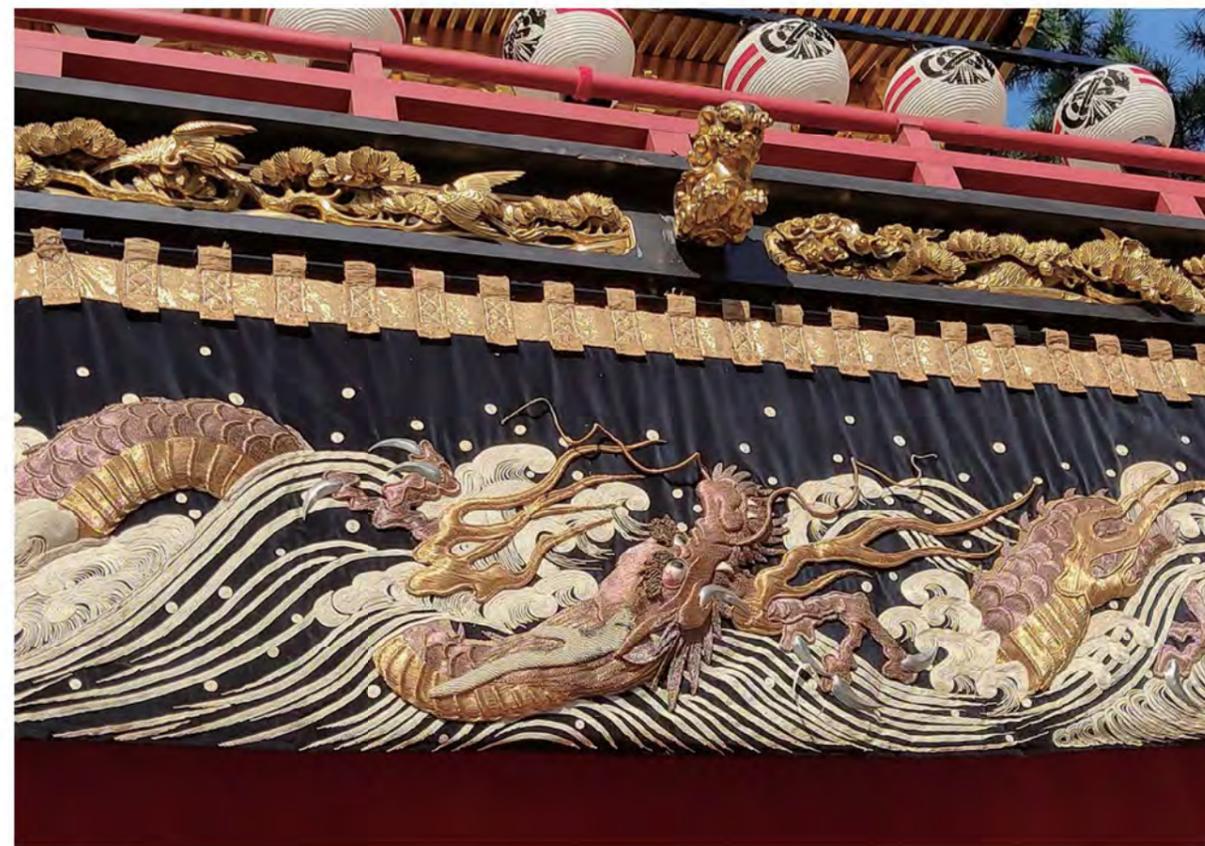
山車の両側と背面には、猩々緋色の幕を垂れ、その上に黒地に金糸銀糸を用いた龍の刺繍がこれまたみごとです。

目にはガラス玉をはめ、爪には銀板が貼ってある水引幕です。

こちらは一見の価値があります。



▲【水引幕】波間に龍が立体的に浮き出た迫力のある刺繍 後面



▲側面 左側



▲側面 右側



# 西中乃切の祭囃子

## 状況に合わせて変えられる曲目

山車の囃子に用いられる鳴り物（楽器）は大太鼓、小太鼓、鼓、笛、三味線、鉦などがあります。

囃子の曲目は、山車の道行きの緩急およびそれぞれの状況に合わせて変えられ、行き、宮入、帰り囃子などがあり、西中乃切特有の曲目もありました。

西中乃切に伝わる囃子は、まち曳きの際の曲として、文化・文政以来という「七草、大拍子」の曲があり、これ

は、山車がゆらりゆらりと練り歩くさまを描写したものとされています。また歌舞伎芝居にちなむとされている「六法」の曲や山車の車軸が奏でる音をアレンジしたという「轆車」の曲もあります。

さらに、山車の方向転換、登り坂の際には、テンポの速い「車切り」の曲を演じます。宮入をした山車は、神前で「夜神楽」の曲を奉納し、町内と山車を曳く時の安全を祈願したものです。



▲太鼓「大拍子・六法」

▲太鼓「七草・夜神楽」



▲笛「夜神楽」



▲笛「轆車」



▲笛「大拍子」



▲笛「七草」



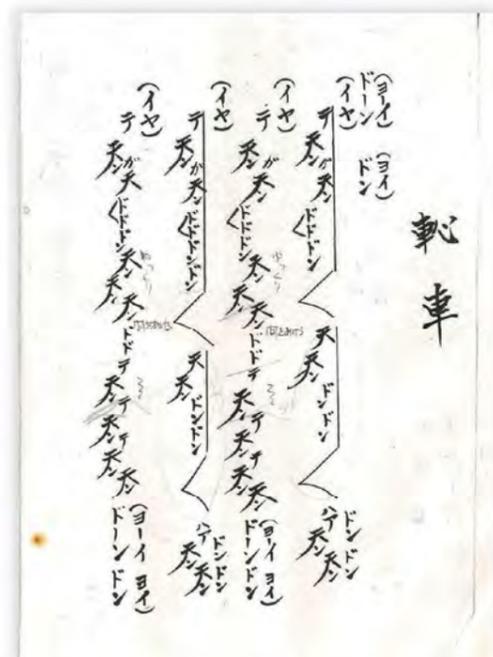
▲笛「六法」



▲笛「車切」



▲三味線「夜神楽・七草」



▲太鼓「轆車」





▲ 昭和30年頃



▲ 平成2年 矢作二区・三区山車揃踏み



▲ 昭和40年頃



▲ 昭和48年

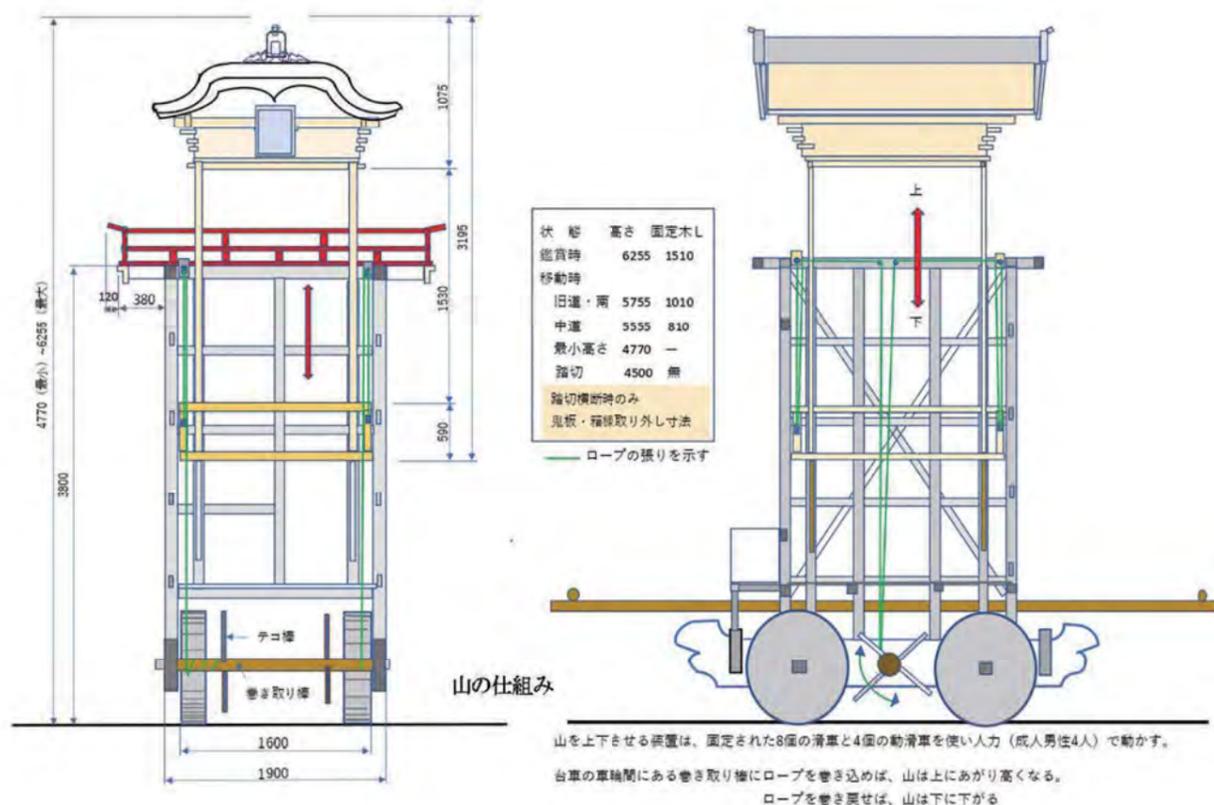


▲ 平成30年 名鉄線ガード下を初めて潜る



▲ 平成30年 名鉄線踏切を初めて横断

# にしなかのきれしく 西中乃切の仕組み



## 西中乃切山車 関連年表

元号	西暦年月日	事項
文政11	1828.07.01	矢作川天王堤切れ、矢作村 大洪水災害
天保2	1831	東乃切（一区）山車製作（彫刻）瀬川治助重貞 裏書墨書
天保10	1839.06	西中乃切（三区）山車製作（彫刻）瀬川治助重貞 裏書墨書
天保12	1941	牛頭天王社祭で揉め事 ※解決まで曳行禁止
弘化3	1946	取極規定書 揉め事和解 ※和解まで5年間曳行できず。
嘉永4	1851.01	矢作村 大火災害
嘉永7	1854.06	西乃切（四区）山車製作（彫刻）瀬川治助重光
文久元	1861	東中乃切（二区）山車改築（彫刻）瀬川治助重光 ※文化11(1814)年製作
慶應2	1866.08	弥伍膳社石燈籠二対建造 井戸連中、若連中(石燈籠裏に記載)
明治24	1882.06	鬼板新造？(長持墨書に記載)
大正4	1915.09	西乃切（四区）山車知多山海へ売却
大正8	1919	弥伍膳社大祭（狛犬台、玉垣柱に記載）
大正15	1926.11	東乃切（一区）山車刈谷泉田へ売却 ※後に知立宝町へ転売
昭和3	1928.11	御大典（石燈籠奥石碑に記載）※山車曳行は不明
昭和19	1944	額田桜井寺へ飾り物を疎開
昭和20	1945.07.19	岡崎空襲 三区集会所の山車胴柄、車輪焼失
昭和25	1950	山車曳行
昭和30	1955	矢作町、岡崎市へ合併
昭和31	1956	山車曳行
昭和43	1968.02.08	岡崎市有形民俗文化財に指定
昭和48	1973	山車曳行、山車収納庫建設
昭和49	1974	山車曳行
昭和61	1986	弥伍膳社本殿修理
平成02	1990.11.12	御大典記念山車曳行【合同曳行】[大棒長：鋤柄欣有]
平成05	1993.10.02	山車曳行 [大棒長：野村豊治]
平成11	1999.10.02	山車曳行 (国道1号初横断) [大棒長：野村豊治]
平成17	2005.04	愛 地球博（愛知万博）「愛知の山車百輛揃」（長久手会場）参加展示
平成22	2010.04	矢作三区山車保存会発足
平成22	2010.10.02	山車曳行 [大棒長：若園勝輝]
平成25	2013.10.02	山車曳行 [大棒長：金森誠也]
平成28	2016.10.01	岡崎市制100周年「矢作の里まつり」記念山車曳行【合同曳行】[大棒長：若園勝輝]
平成29	2017.04	山車上山修理・屋根復元工事 上山:中根仏壇店 屋根:名古屋創作工芸
平成30	2018.10.06	山車曳行 修理完了お披露目（名鉄線初横断）[大棒長：金森誠也]
令和5	2023.10.01	山車曳行【合同曳行】[大棒長：林靖広]
令和7	2025.10.04	山車曳行 [大棒長：山田学] 矢作町合併70年 山車記念誌発行

ひがしなかのきれ  
東中之切

ちやうこく  
彫刻



ひがしなかのきれだし ちやうこく  
東中之切山車の彫刻

ひがしなかのきれ ちやうこく まえやま ぶ ぶん だんばこ  
東中之切の彫刻は前山の部分に壇箱、  
し ほんばしら らんま おにいた げ ぎよ ほどこ  
四本柱、欄間および鬼板と懸魚が施さ  
れ、上山の四方には6枚の欄間が据え  
つけられており、全ての彫物には金箔  
が施されています。

だんばこ うしわかまる からすてんく けんじゆつ しゆ  
壇箱には牛若丸が烏天狗と剣術の修  
行を行っている様子が描かれ、四本  
ばしら のほ りゆう くだ りゆう ほ こ  
柱には昇り龍と降り龍が彫り込まれ、  
らんま うんすいおや こりゆう おにいた ほてい  
欄間には雲水親子龍が、鬼板には布袋  
からこ たからづくし さらに げ ぎよ なみ  
と唐子と宝尽くが、さらに懸魚には波に  
じゃしんちやう ほ こ  
蛇身鳥が彫り込まれています。

うえやま しほう つ まい らんま うん  
上山の四方に付く6枚の欄間には、雲  
すいおや こりゆう なみ じゃしんちやう ほ こ  
水親子龍および、波と蛇身鳥が彫り込  
まれています。上山と前山の欄間に彫  
られた龍の目には、玉眼という加工が  
ほどこ 施されています。

これらの彫刻はぶんきゆうがんねん (1861年)  
に上山と前山の大改造が行われた際  
に、うえやま まえやま だいかいぞう おこな さい  
瀬川治助重光が彫物を手掛けた  
もので、だんばこ みぎて いんぎやう ほ  
壇箱の右手に2つの印形の彫  
りが残されています。



▲【檀箱】牛若丸と烏天狗および松と孔雀

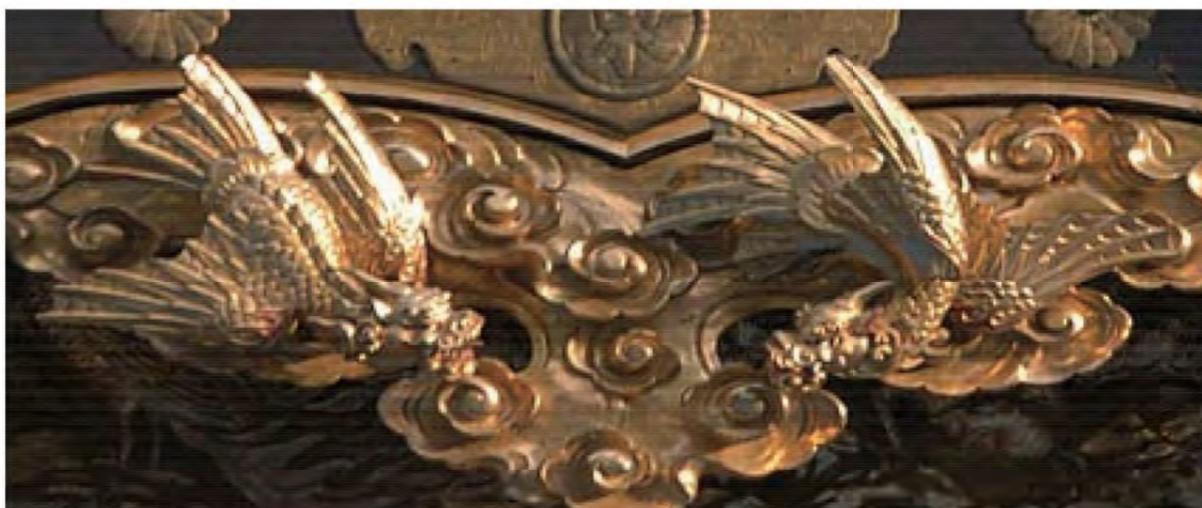




▲【鬼板】布袋と唐子と宝尽し



▲【欄間】雲水親子龍



▲【懸魚】波に蛇身鳥



▲【四本柱】降龍と雲波  
脇障子に書かれた言葉「懐佳人兮不能忘」  
（漢の武帝による「秋風の辞」の一説）  
《意味》良き友を決して忘れることなく、大切に下さい。



▲【四本柱】昇龍と雲波  
脇障子に書かれた言葉「今夕止可談風月」  
（「秋風の辞」に由来する古代中国の故事成語）  
《意味》公務の話は避け、今夕の風月を善き友と共に語りあおう。

ひがしなかのきれ  
東中之切

みずひきまく  
水引幕



▲旧水引幕：奥村石蘭 画の「鳳凰」の刺繍

ひがしなかのきれだし みずひきまく  
東中之切山車の水引幕

ひがしなかのきれ かざ みずひきまく げんざい  
東中之切に飾られる水引幕は、現在の  
ものが3代目となります。

しょだいみずひきまく そうけんじ つく 物の  
初代水引幕は創建時に作られた物と  
推察しますが、平成29年（2017年）に  
発見された際は、金糸を用いて描かれ  
た龍頭と宝珠、および、雷と波は残っ  
ていましたが、布生地は劣化が激し  
く、原型をとどめない状態でした。そ  
こで、残っている龍頭と宝珠を整え、  
額に入れ山車蔵に展示してあります。

だいめみずひきまく あんせいねん  
2代目水引幕は、安政2年（1855年）  
に奥村石蘭によって作られた物で、4  
体の鳳凰の刺繍、4体の麒麟の刺繍 お  
よび、全面に彩雲を配置し、後の部分  
に東と石蘭の刺繍の文字が描かれ、  
長さ8m90cm、幅70cmの生地の全面  
に金糸を織り込み、とても豪華な飾り

まくでしたが、作られてから150年が経っ  
た平成25年（2013年）には金糸の剥が  
れが全面に広がり、作り替えを決断し  
ました。

だいめみずひきまく おかざきし ひじつはくぶつかん  
2代目水引幕は岡崎市美術博物館で  
保管されています。

だいめみずひきまく おかざきし ゆうけいみんぞくぶんか  
3代目水引幕は、岡崎市の有形民俗文化  
財である山車の説明で、鳳凰と麒麟が描  
かれた飾り幕と書かれているため、麒麟  
と鳳凰のデザインと全面に金糸で覆う事  
を必須として、京都の川島織物セルコン  
にデザインと製作を依頼し、幾度もデザ  
インの変更を繰り返し、費用の問題も含  
めて麒麟が2体、鳳凰が2体と彩雲を描  
き、後部位置に東の文字を描くデザイ  
ンで決めました。



▲ 金地織りに金糸と正絹糸で「麒麟」、「鳳凰」と「瑞雲」の刺繍



▲ 後ろ面にある「東」の刺繍

初代水引幕

2017年7月、初代水引幕と思われる水引幕が発見されました。その幕から「龍頭と宝珠」を取り出し、額に入れ山車蔵で大切に保存しています。



飾り襖



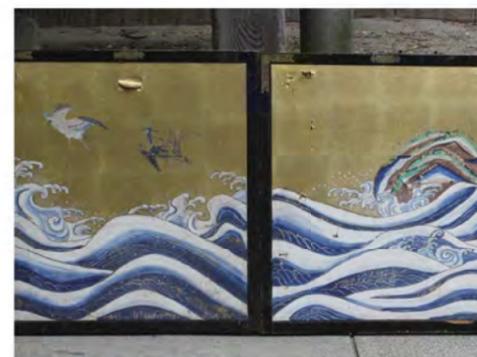
上山天井龍神図飾り

明治3年に鈴木寿山によって描かれたと思われる龍神絵図です。可能な限り修復を施し、山車蔵で保管展示しています。



背面飾り襖

明治3年に鈴木寿山によって描かれたと思われる夫婦岩絵図です。3枚折り重ね収納構造になっています。可能な限り修復を施し、山車蔵で保管展示しています。



側面飾り襖

明治3年に鈴木寿山によって描かれたと思われる側面の飾り襖です。可能な限り修復を施し、山車蔵で保管展示しています。



▲ 裏面に貝の落書きが描かれています。



# 東中之切の祭囃子

## 山車の道行に合わせた曲目

東中之切の祭囃子は、戦後しばらく途絶えていたものを、昭和49年(1974年)の山車曳行に併せ、笛、三味線、鳴り物の指導者を招き、新たに習得したものです。

今演奏している楽器編成は、大太鼓1名、小太鼓1名、三味線1~2名、笛6名(曳行中は2名1組として交代で演奏)となっています。

曲目は山車の行き帰りや、坂の上り下りなどの状況に合わせて変えてお

り、曲の数は5曲です。  
 曲名は、まち曳きでは主に、往路で演奏するゆっくりした曲調の「徳川」・「箱根」、主に帰路で演奏するゆっくりした曲調の「喜撰」があります。  
 また山車の出発時や昇り坂 および、方向転換時に演奏するテンポの早い「追回し」と、帰路の宮入りなどで演奏する「夜神楽」となっています。

曲名: 徳川 調子: 三下がり

▲ まち曳き往路の曲「徳川」

曲名: 箱根 調子: 三下がり

▲ まち曳き往路之曲「箱根」

曲名: 喜撰 調子: 二上がり

▲ まち曳き帰路の曲「喜撰」

喜撰

▲ まち曳き帰路の曲「喜撰」

曲名: 追回し 調子: 三下がり

▲ 出発、登坂、方向転換の曲「追回し」

追回し

▲ 出発、登坂、方向転換の曲「追回し」

▲ 5曲分の打楽器の譜





▲ 昭和31年



▲ 平成17年 愛知万博での展示の様子



▲ 昭和31年

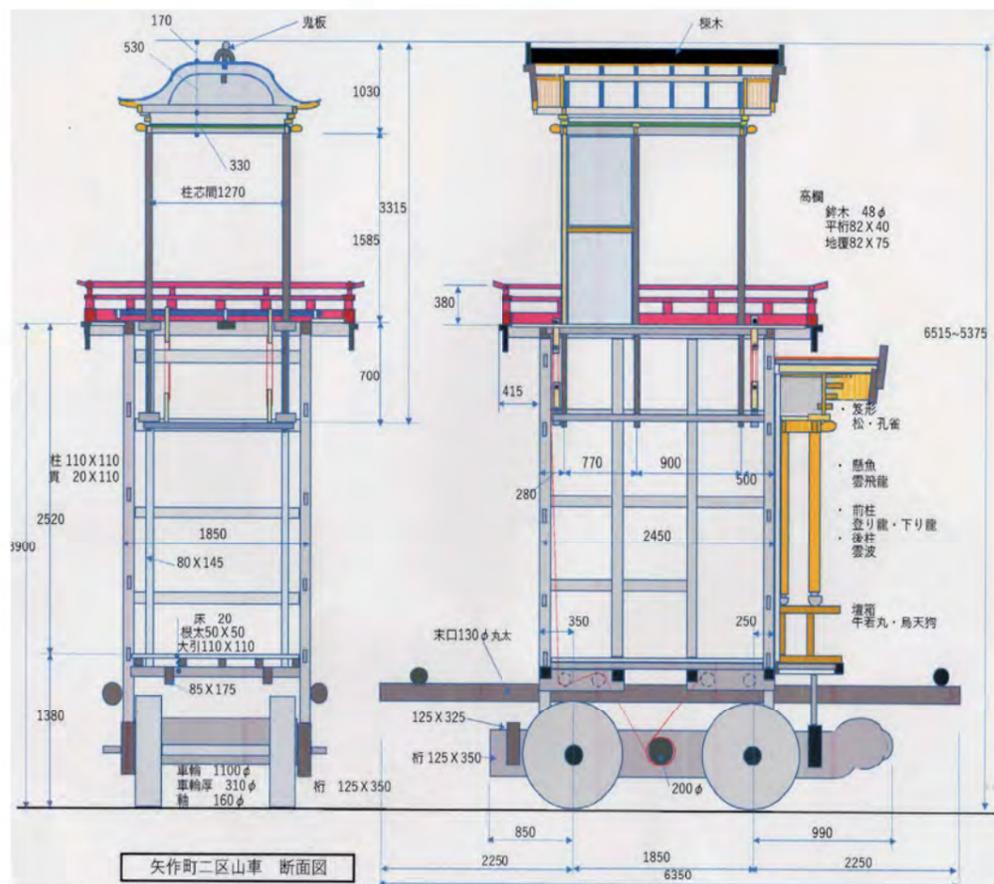


▲ 昭和48年



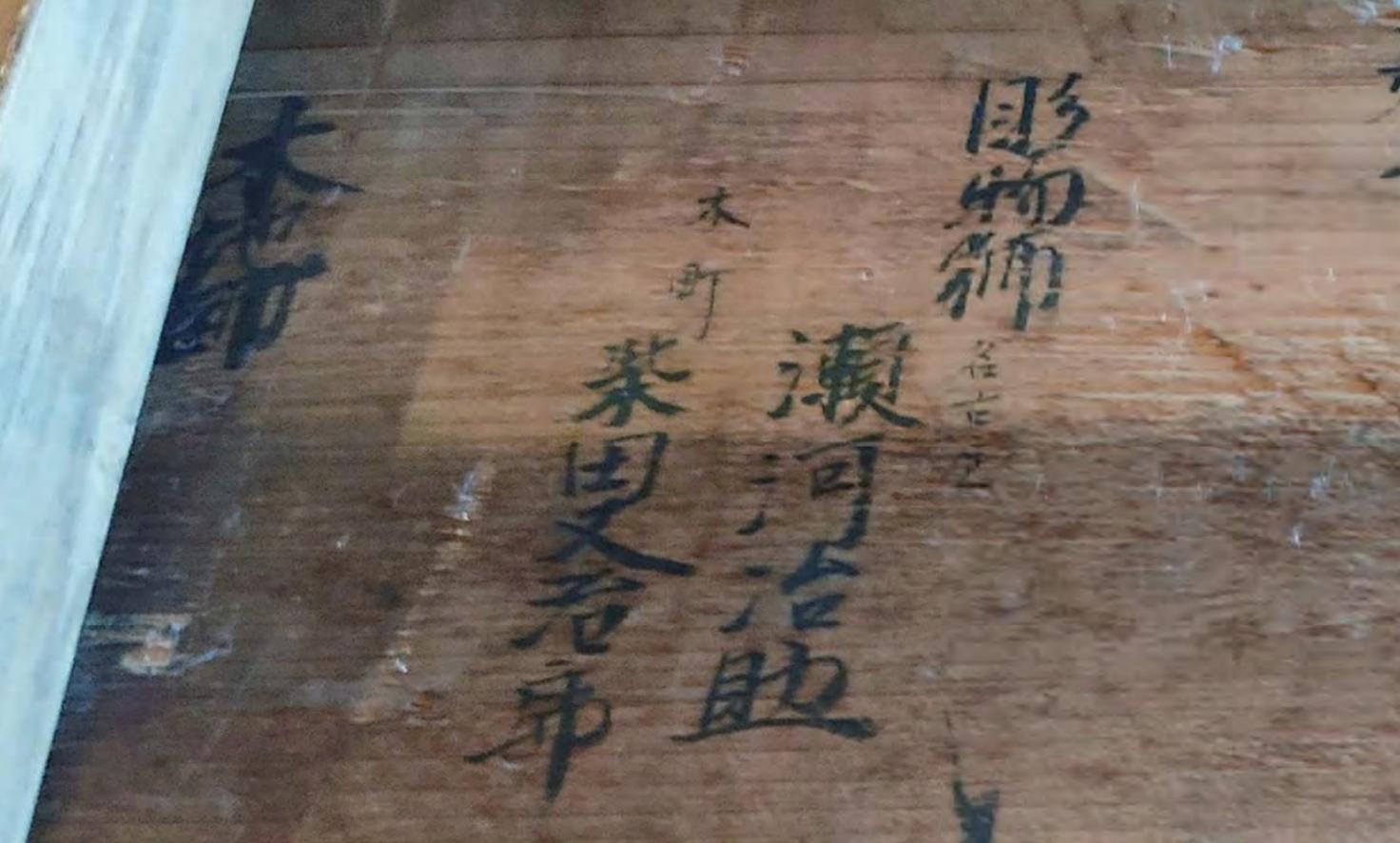
▲ 令和5年

# ひがしなかのきれだししく 東中之切山車の仕組み



## 東中之切山車 関連年表

元号	西暦年月日	事項
文化11年	1814	東中之切は素木で建造される
文政2年	1819	漆で仕上げ加工される。【彩色師】岡崎材木村 又左衛門
文政11年	1828	大幕（猩々緋幕）完成
天保11年	1840	上山の建造と漆塗りが施される【頭領】大山庄八【塗師】加藤庄七他
安政2年	1855	2代目水引幕完成。【図案者】奥村石蘭
文久元年	1861	前山 及び、彫刻飾りの完成。【彫師】瀬川治助重光
明治3年	1887	上山天井の龍神図、夫婦岩図、側面飾り襖の完成。【作者】鈴木寿山
昭和31年	1956	台輪車軸 2本交換・町内引廻実施
昭和47年	1972	山車蔵完成
昭和48年	1973	岡崎市有形民俗文化財に指定。町内引廻実施
昭和49年	1974	前掛幕新調・祭囃子五曲の再設定・町内引廻実施
昭和53年	1978	町内引廻実施
昭和58年	1983	町内引廻実施
平成元年	1989	町内引廻実施
平成2年	1990	町内引廻実施
平成3年	1991	上山天井の龍神図、夫婦岩図、側面飾り襖のレプリカ完成。
平成6年	1994	町内引廻実施
平成17年	2005	愛知万博の『愛知山車からくり総揃え』に展示
平成22年	2010	矢作2区山車保存会発足
平成23年	2011	町内引廻実施、17年振り
平成26年	2014	赤御神燈 2塔作替え、水引幕3代目完成、前掛幕修理、完成披露式実施（岡崎市長同席）
平成28年	2016	提灯大小33塔新調、電線揚棒2本新調、竹敷 4枚準備、やはぎの里祭り、町内引廻実施
令和4年	2022	3本継ぎ旗竿を2本取付け。
令和5年	2023	前山及び、上山屋根の修理、上山屋根軒板に「東中切」と鳥衾を再現、竹敷 8枚準備、町内引廻実施



## 彫刻師

# 瀬川治助重定・瀬川治助重光



## 親子3代にわたる名古屋の彫刻師

江戸時代後期の文化・文政年間から明治時代初期にかけて名古屋に瀬川治助という彫刻師がいました。

治助は世襲名であり、初代瀬川治助しげさだ、2代瀬川治助重光、3代瀬川治助鍋三郎へと受け継がれています。

末広町（現在の名古屋市中区栄）に住み、庶民的な治助の彫刻は尾張や西三河の広い範囲にわたっており、さらに静岡、岐阜、三重にまでその作品は残っています。

## 東中之切と治助

東中之切の彫刻についての記録類はありませんが、壇箱彫物の側面隅に「瀬川」の陽刻 および、「重光」の陰刻と、二つの印形の彫があります。



前棚に施された彫刻全体の技法がほぼ同じであることから、瀬川治助重光が手掛けたものと推察されます。

壇箱 および、前山を含む山車全体の彫刻は、文久元年（1891年）の前棚改造に合わせて施工されたものといわれています。

彫物の全てが彩色金彩であり、豪華絢爛の趣がありますが、特に前柱の「巻き龍」や壇箱の「牛若丸・烏天狗」の金彩色彫物は東中之切山車の見物と言えます。

また、東之切（一区）の彫刻は瀬川治助重定、西之切（四区）の彫刻は瀬川治助重光のものであることが、わかっています。

※「瀬川治助 木彫の世界」（水野耕嗣 編著）P114より抜粋・加筆

## 西中乃切と治助

西中乃切の彫刻についての記録類もありませんでしたが、技術者一覧が墨書で前棚屋根裏から出てきました。天保10年（1939年）瀬川治助重定59歳の作品です。



また脇障子彫物の隅には朱で「清川」の刻銘があります。

ですが江戸末期に東海地方で清川という名の彫刻師はいなかったといわれています。

そのため、この「清川」は「きよかわ」ではなく、「せいかわ」→「せいかわ」→「せがわ」と読めば、瀬川治助の名と結びつきます。

瀬川が「清川」と署名した例は他にないため、なぜそう刻んだかは明確ではありませんが、瀬川のシャレだったのかもしれない。

全て金箔彩色仕上げで、人物や龍の眼にはガラスが入っています。特に前柱の「竹虎の透彫り仕上げ」や前棚壇箱の「力神」や「雲水一匹龍」、脇障子の「獅子の干尋の谷落とし」は、西中乃切山車の見物といえます。

また、東之切（一区）の彫刻は瀬川治助重定、西之切（四区）の彫刻は瀬川治助重光のものであることが、わかっています。

※「瀬川治助 木彫の世界」（水野耕嗣 編著）P114より抜粋・加筆

他の地域で活躍する山車【東之切】



「刈谷泉田中組の山車」昭和3年（1928年）10月 泉田郷土研究会蔵

東之切（現矢作町一区）山車の行方

矢作村八剣社の祭礼山車【東之切】

は天保2年（1831年）建造され、祭り組の【東之切組】で保存され、矢作神社祭礼においてはほかの3両の山車と共に、競ってまち引きが行われていました。

大正12年6月に名古屋鉄道の前身である愛知電気鉄道が開通し、高架橋に遮られてしまったため八剣社から矢作神社まで山車を曳行することができなくなりました。やむなく山車は碧海郡刈谷町泉田中組（現刈谷市泉田町）へ売却されること

になりました。

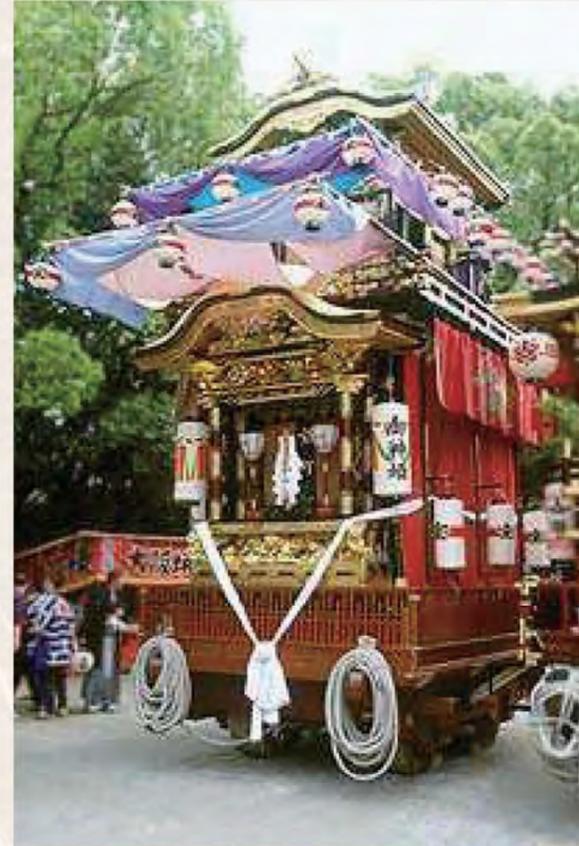
その後、昭和22年（1947年）に泉田町から更に知立市宝町へ売却され、知立神社の祭礼山車として知立市宝町住民により保管され、2年毎の本祭りには5両揃っての町内曳き廻しが行われています。

後部に位置付く若衆が梶棒を担ぎ上げ、後ろの車輪を浮かせたまま知立神社鳥居を進み、それから一斉に手放し、山車を地面に叩き落とす曳き廻し技法は迫力満点です。

この山車の彫刻も瀬川治助重定によるものとわかりました。

現在の東之切山車

知立市



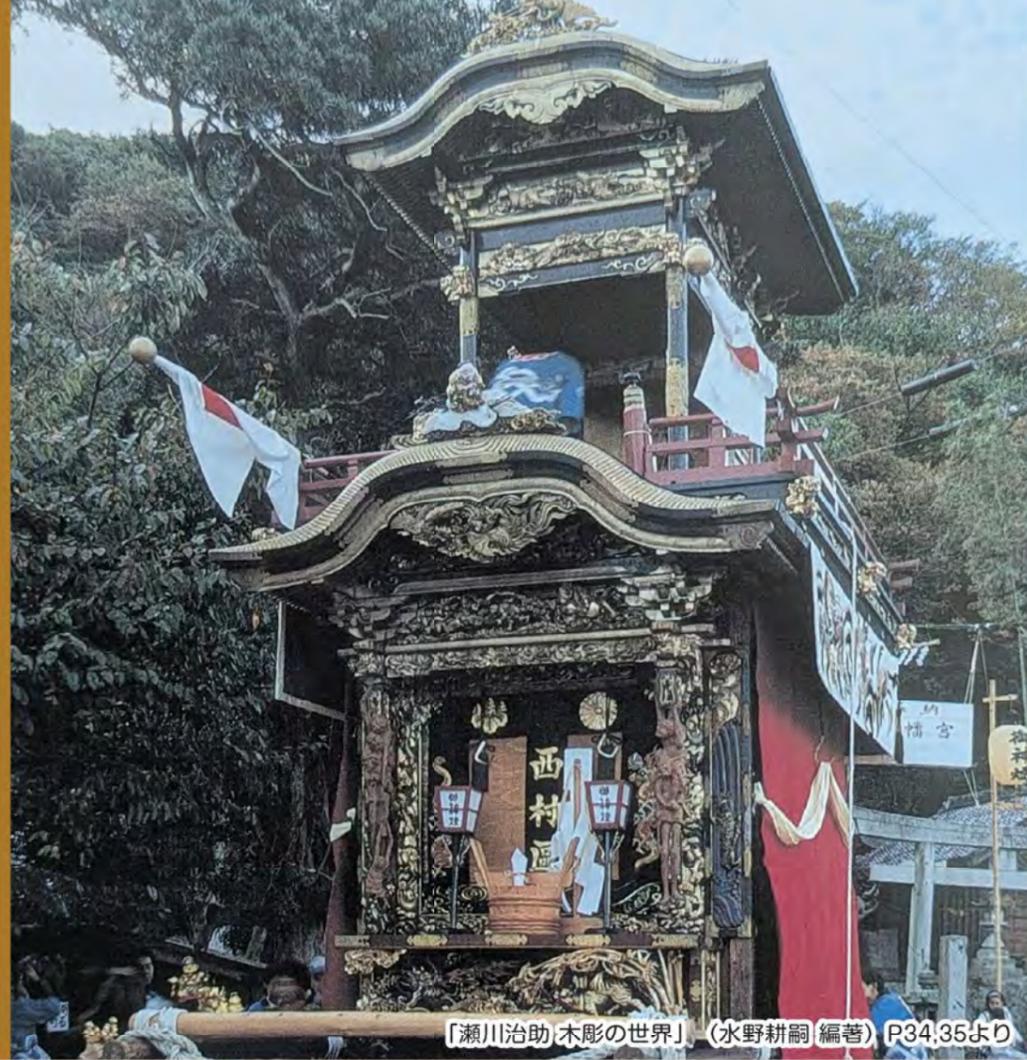
▲ 知立神社の祭礼（知立まつり）の様子

現在の西之切山車



▲ 知多郡南知多町山海西村区「八幡社」の祭礼の様子（内田雄次氏撮影）▲

他の地域で活躍する山車【西之切】



【瀬川治助 木彫の世界】（水野耕嗣 編著）P34,35より

西之切（現矢作町四区）山車の行方

江戸末期、矢作村窮樹社（別名サブサ社）の祭礼山車として嘉永7年（1854年）建造され、祭り組の【上之切組

（西之切）で保管されていました。上之切組（西之切）は当時70戸位で大車を造り、まち引きを競っていましたが、時代とともに祭りへの参加者が少なくなりました。

明治の終わりが大正の初め頃に知多郡南知多町山海に売却されました。

山海と矢作の繋がり、山海の松材を船で矢作まで搬入する行き来があったといひます。山車の輸送も矢作川から

船で運ばれたと伝えられています。現在は知多郡南知多町山海西村区「八幡社」の祭礼山車として保管され、ほぼ3年毎の10月第5日曜日に町内曳き廻しが行われています。

この山車の彫刻も、箱書きから瀬川治助重光の作品であることがわかっています。

矢作町四区で、仏壇店を営んでいた岩つきまが、この山車のレプリカを精巧に創られ、現在やはぎかん1階ロビーに展示されています。



▲ 前山上部【懸魚】と【中備】

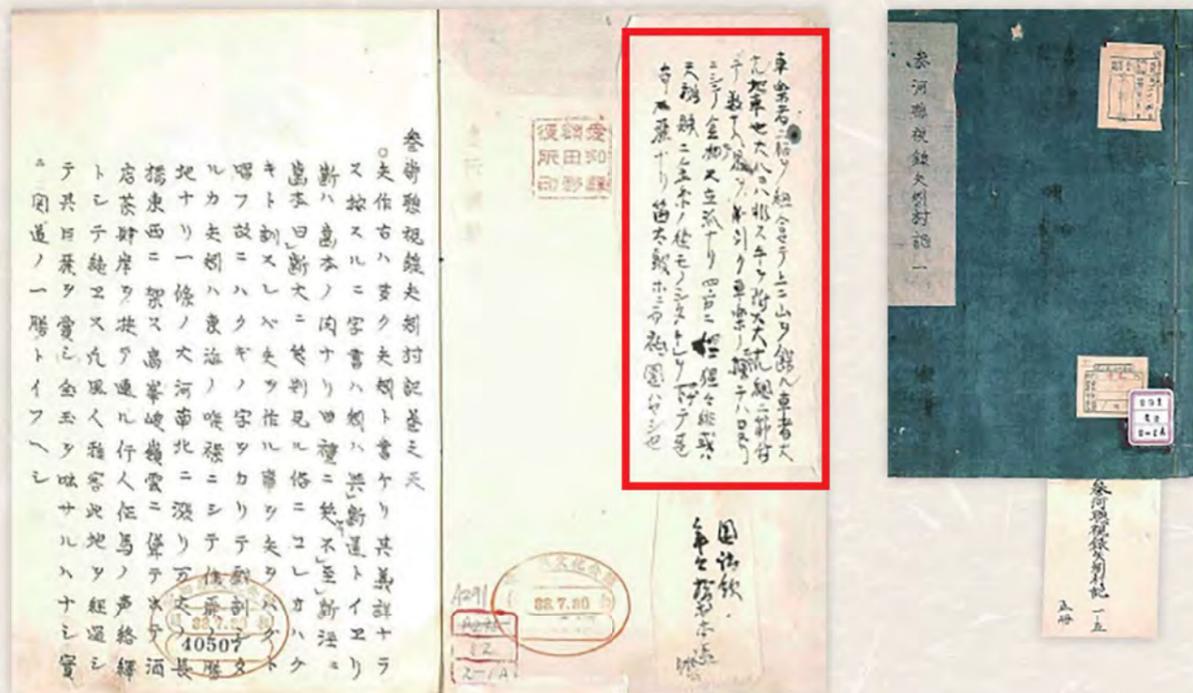


▲ 【檀箱】左隅 力神 ▲ 【檀箱】右隅 力神  
【瀬川治助 木彫の世界】（水野耕嗣 編著）P34,35より



▲ やはぎかん1階に展示されているレプリカ

# 記録の中の「矢作の山車」



▲「参河聴視録 矢作村記 第1巻」愛知県図書館所蔵 加茂久算筆、嘉永2年(1849)頃成立

## 山車と曳き回しの様子

江戸時代の「矢作のまち」について書かれた詳細な地誌「参河聴視録 矢作村記」の中に「矢作の山車」の記述がありました。裏表紙の右上に紙が貼られ書き加えられたものでした。

「車楽者二輛ヲ組合セテ上ニ山ヲ飾ル、車者大ナル地車也、大八二八非ス、牛ヲ付ス、大ナル綱二筋付テ数十人是ヲ引ク、車楽ノ欄干八口ヌリニシテ金物又立派ナリ、四方ニ猩々緋或八天鵝絨二金糸ノ縫モノシタキレヲ下テ甚奇麗ナリ、笛太鼓等二而祇園ハヤシ也」

「車楽」は、だんじりと読み、山車のことです。

「車楽は(車を)2両組合せて上に山を飾る。車は大きな地車であり、大八車ではない。牛をつなぎ、大きな綱を二筋(本)つけて数十人で引く。欄干は塗装がしてあり、金物(金箔を貼った彫刻)はたいへん立派である。四方に猩々緋(赤みの強い赤紫色)あるいは天鵝絨(暗い青みの緑色)に、金糸の縫いものをした布を下げて、甚だ綺麗である。笛太鼓などにあわせて(山車を曳くさまはまさに)祇園(祭りの)囃子である。」という内容が書かれています。当時の人がみた矢作の山車や曳き回しの様子がよく書かれています。(注：宮川意訳)



◀ 矢作神社奉納絵馬「矢作橋杭打図額」(矢作神社所蔵)延宝2年(1674年)橋上に1本の杭を中心として、多くの人々が左右に分かれ、綱を引いて杭をゆすり込むところを描き、橋の下には山車船が2艇(右下)、遠景に矢作神社(左上)が描かれています。

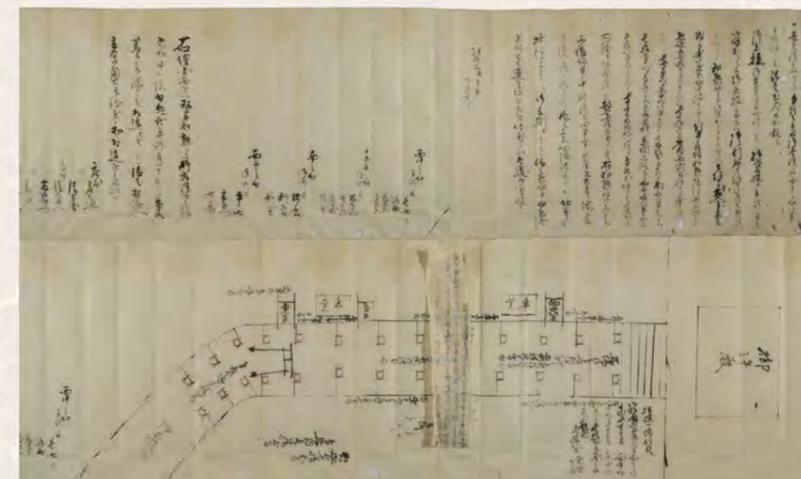
## 山車船が2艇

上記の絵馬は、延宝2年6月に架け替えが完成した矢作橋を祝して、矢作神社に奉納されたものです。大きさは縦137.3cm、横186.3cmと絵馬としてはかなり大きなものです。この頃矢作のまちに山車があったかは定かではありませんが、山車船が2艇描かれています。

矢作橋は当時江戸幕府が直接架けていた橋であり、大修繕や架け替え工事がひんぱんにあったことから、矢作のまちに江戸の最先端の文化がもたらされました。矢作神社に奉納された絵馬は当時江戸の最新の流行で、矢作の山車文化にも何らかの影響を与えたかもしれません。

## 5年間山車を曳くことができなかつた

天保12年(1841年)の牛頭天王社(矢作神社)の祭の時に、境内での山車の場所について揉め事となり、それが岡崎城主にも伝わることとなりました。代官により調停が試みられましたが解決にいたらず、解決するまでは山車の曳行をしないという事態になってしまいました。その後矢作村中で話し合いが行われ、境内での山車の場所について、取り決めが行われ、それを図面と文書に残したものです。文書の日付は弘化3年(1846年)とあり、5年間山車が曳けなかつたこととなります。文書には「今後はこの絵の図面を以て取りさばくこと」「これからは何があっても仲良く睦まじくいること」と結ばれています。



▲ 山本肇家文書「取極規定書」：岡崎市美術博物館所蔵(協力学芸員安本翔音氏)

# 矢作のまち

まちの歴史を紐解く



矢作のまちにどうしてこんな立派な山車が4両もつくられたのか、その謎をひもとく鍵は、矢作のまちの成り立ちと、当時の人々の暮らしを調べてみる必要があります。

また、矢作のまちと山車との関係を知るうえで、矢作のまちの成り立ちと人々の暮らし、矢作川の水害との関係も切っても切り離すことはできないでしょう。

ここで矢作のまちの歴史を少し紐解いてみましょう。

▲ 矢作のまちから見た「矢作橋」「矢作川」「岡崎城」の景色

## 矢作の名前の由来

この地は古く「蓬里」と呼ばれていました。「古事記」にある第十二代景行天皇の時代、東海の賊を平定するため当地を訪れた日本武尊が、戦いの神「素戔鳴命」をお祀りし、矢作部に矢

を作らせたことから、このあたり一帯を「矢作」と呼ぶようになったといわれています。

また、この地を流れる「矢作川」は、ここ矢作の地の名前からつけられています。



▲「東海道五十三次 岡崎」歌川広重作 国立国会図書館所蔵※矢作のまちから「矢作橋」「矢作川」「岡崎城」を描いている

## 矢作のまちと矢作川

かつての矢作川は、現在のような堤防はなく、岡崎台地と碧海台地とのあいだの平野部を網目状に流れていました。

その中で、まわりの土地より少しだけ



▲「松應寺古絵図」松應寺所蔵  
かつての矢作川は平野部を網目状に流れていた。

小高い「自然堤防」と呼ばれる土地にひとびとは集落を形成し、農業を中心に営み暮らしていました。

矢作のまちは、古く中世のころから、東西を結ぶ街道と南北を流れる矢作川が交差する地点に位置し、とてもにぎわっていたと考えられています。

室町時代の頃あたりから、矢作川に堤防がつけられるようになり、少しずつ流路が人工的に変えられるようになります。

そして江戸時代のはじめころには、堤防により矢作川の河道が一本化され、ほぼ現在と同じ流路になったといわれています。またこのころ江戸幕府によって矢作橋が架けられました。



▲「三州岡崎矢作橋図」水野家文書 東京都立大学図書館所蔵  
岡崎藩主であった水野家が所有していた絵図(江戸時代初期)。当時の矢作のまちの様子と矢作橋と岡崎城が描かれた貴重な絵図です。

### 豊富な伏流水とくらし

堤防で仕切られた矢作のまちは、幾筋もの矢作川からの伏流水(湧き水)が流れる良好な農地となり、江戸時代、岡崎藩きっての米どころとして、

長期にわたり藩の財政を支える存在になります。

しかし、この頃につくられた堤防は、現在のように、高く、頑丈ではありませんでした。

### コラム

#### 「矢作御橋記録」※矢作町に残る江戸時代の矢作橋の架け替え記録

矢作橋は江戸時代日本一の長大橋でした。「天下普請」といわれ江戸幕府が直接架ける橋でした。その壮大な様子が多くの浮世絵や紀行文などにかかれる、東海道岡崎を代表する名所であったのです。今でも矢作のまちにはその痕跡が数多く残されています。そのうちのひとつに「矢作御橋記録」があります。水害などで橋が流失するたびに、幕府から奉行が任命され、多くの役人や技術者を引き連れ、矢作のまちに1~2年滞在して工事を行いました。江戸時代に9回の架け替えがされたことなど、当時の様子が詳細に記録されている貴重な史料です。



▲ 矢作御橋記録 (矢作町個人所蔵)

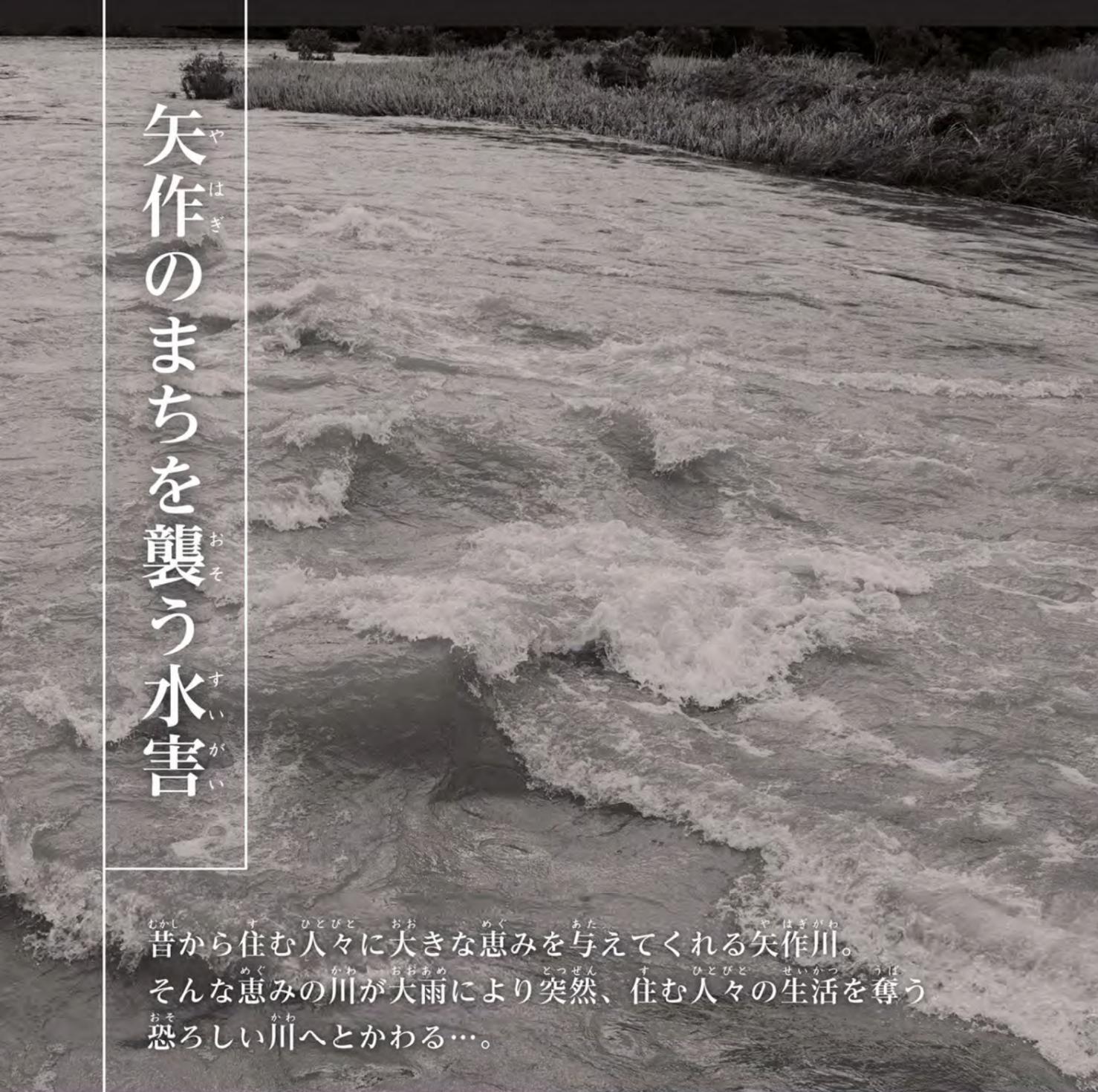


▲ 矢作のまちの絵図(江戸時代後期頃) 矢作神社所蔵  
矢作のまちに矢作川の豊富な伏流水が幾筋も流れている様子がわかります。



▲ 矢作のまちのようすを描いた絵図「東海道分間延絵図」東京国立博物館所蔵  
江戸幕府が東海道の状況を把握するために、道中奉行に命じて作成した詳細な絵地図です。作成の命が出されたのは寛政年中(1789~1801)のことで、文化3年(1806)に完成しています。絵図には、問屋・本陣・脇本陣・寺社・一里塚・道標・橋・高札などが丹念に描かれています。(※絵図の中に「祭り組」の位置を重ねてみました)

# 矢作のまちを襲う水害

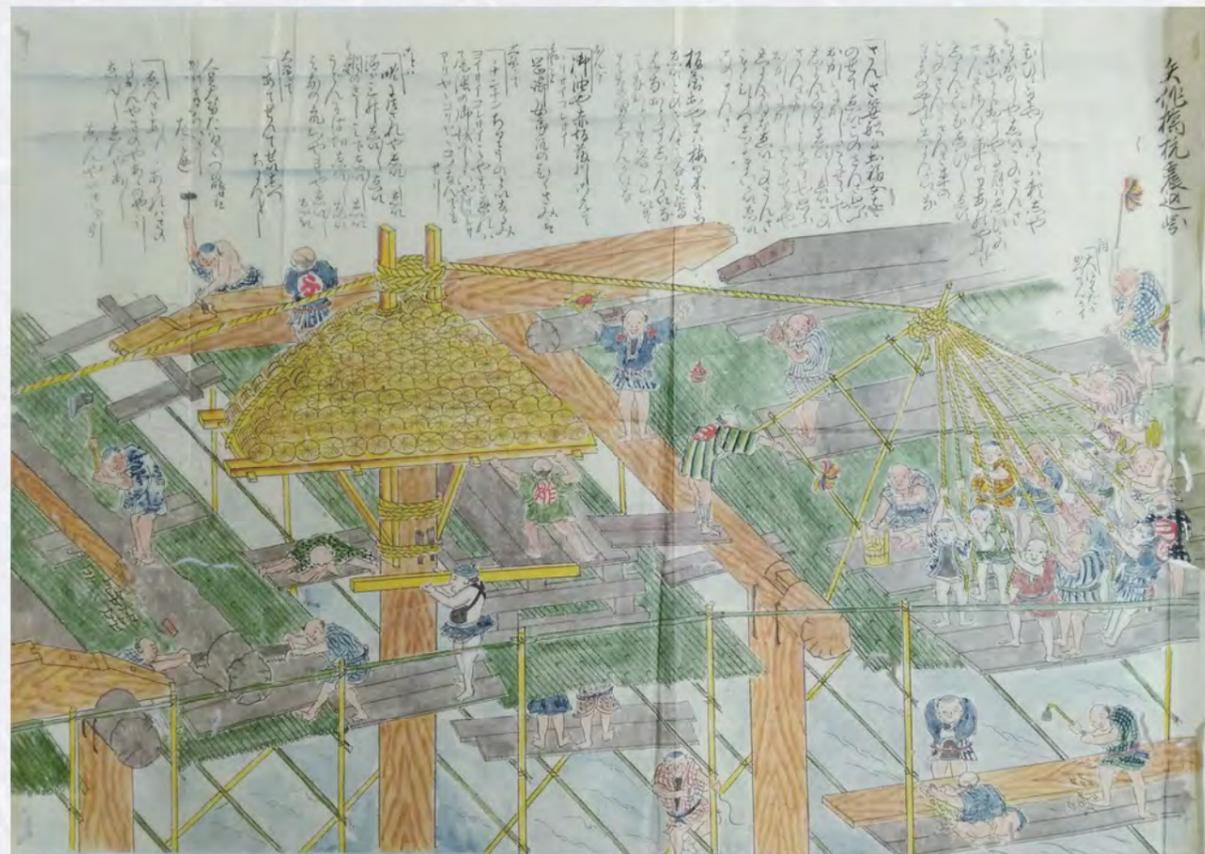


昔から住む人々に大きな恵みを与えてくれる矢作川。  
そんな恵みの川が大雨により突然、住む人々の生活を奪う  
恐ろしい川へとかわる…。

## 幾度となく決壊する堤防

矢作川は、上流に花崗岩でできた山々が連なり、それらが少しずつ風化し白砂となり流れ出される珍しい川です。矢作のまちのある中流域のあたりでは、上流から供給される白砂が、堤防で仕切られた矢作川にどんどん流れ込

み、天井川(川床が非常に高い川)化してきました。江戸時代中期ころには、少しの雨でもすぐに水位があがり、氾濫をおこす危険性が高くなってしまいました。



▲ 水野家文書「矢作橋杭震込図」東京都立大学図書館所蔵

矢作橋架け替え時の普請の様子を描いた絵図です。橋杭の上に土俵をいくつも載せて重しとし、その上に付けられた綱を両側から引っ張り、震り込み杭を貫入させる工法です。上段には、矢作橋架替え木遣り唄が書かれています。普請の作業人工が、杭の貫入時に木遣り唄を唄います。

矢作のまちに住む人々は、農作業のかたわら、大雨による矢作川の氾濫や矢作橋の被災を防ぐための普請(今でいう土木作業)に、昼夜を問わず駆り出されました。人々の日々の暮らしのための負担が次第に重くのしかかるようになっていきました。そして、江戸時代の後期ころには、毎年のように災害が発生し、矢作川の堤防は幾度となく決壊するようになってしまいました。さらには大災害も頻繁におこるようになってしまいました。

一度決壊すると、せっかく育てた作物は収穫できなくなるばかりか、田畑には、砂や水がたまり続け、田畑を再開するまで数年の間収入がなくなってしまうこともあったと伝えられています。災害や飢饉などによる不作、厳しい年貢のとりたてに加え、大災害からの農地や、集落の復興なども重なり、およそ数十年の周期で、筆舌に尽くしがたいほどのつらい日々を過ごしていたことは想像に難くありません。

## 矢作のまちを襲った大水害

記録に残されている中でも、矢作のまちを襲った大水害は、宝暦7年(1757年)「北野切れ」、明和4年(1767年)の大水害、そして文政11年(1828年)の「天王堤切れ」でしょう。

矢作東小学校の北の蛇行部(かつて矢作神社(牛頭天王)があった)の堤が決壊しました。矢作村では252軒の内、76軒が流失し多くの溺死者が出ました。

「文政11年(1828年)7月1日の前日にあたる6月30日は伊勢神宮から『百万度御祓』を氏神の牛頭天王(矢作神社)へ納めるため、矢作のまちは一日中休みにし、西之切、西中乃切、東中之切、東之切は総出でお礼納めにでていました。

雨は朝方から降り始め、夜通し止む間もなく降り続き、夜明けと共に益々烈しくなり、午前10時頃、水量は12尺(約3.6m)になりました。岡崎城から

警戒のため役人が派遣され、橋防ぎをし、村人も堤防に集まり、土俵800個を用意しました。午後1時頃になると大曲りから50間(90m)程下で15間(27m)ほどの水漏れが始まり、さらに川表の方が14間(約25m)ほど欠け込み、みるみるうちに堤防が3尺(約1m)ほど下り、川水が乗り越えはじめたので、今は如何とも為し難し、各々帰って家財道具をまとめ、自分の家を守るよう言いわたされました。

一方、堤防の決潰箇所は益々大きくなり、洪水は弥五騰社の方へ向って早瀬のように、白い泡を立てて奔流となり、渦を巻いて拡がっていきました。大曲堤防から弥五騰社の方へ斜めに流れ、水路にあたる75戸の家は総なめになり、17人もの死者を出しました。この時に流出した川砂は大字筒針まで広がりました。」(「矢作橋のたもと」星野美 著より引用)

## 「生きてゆくための」山車文化

江戸幕府も、岡崎藩も、飢饉や災害がおこると、米を主とした農作物の収穫が減り、財政状況は厳しくなっていきます。財政状況が厳しくなれば、年貢の取り立ても一層厳しくなってきます。そして次第に人々の暮らしは厳しくつらいものになっていきました。このような苦しい暮らしを続ける中で、人々は、自分たちの力ではどうしようもできない、自然災害や疫病などに対して、神仏に頼る、祈るしかなかったのではないのでしょうか。

そして、そのようなつらい生活を続けるだけでは、人々はいつかくじけてしまい、生きてはいけなくなってしまふ……。きっと「生きてゆくための何か」が必要になったことでしょう。その一つとして「祭礼」にそれを求めるようになっていったに違いありません。

矢作のまちに山車がつくられたのは、そんな時代でした。それらのことが、矢作のまちにとっても立派な山車文化をもたらしたのではないかと考えています。



▲ 宝暦7年(1757年)「北野切れ」  
文政11年(1828年)「天王堤切れ」



▲ 勝蓮寺にある明和4年(1767年)の洪水による犠牲者の供養のために建てられた慰霊碑



▲ 弥五騰社にある文政11年(1828年)「天王堤切れ」の犠牲者の供養のために建てられた慰霊碑



先人の祈りが今も灯り続ける

市街化の進んだ矢作のまち



国道1号上の矢作歩道橋から矢作橋方面を望む。

矢作のまちを守る頑強な堤防



文政11年(1828年)「天王堤切れ」のあった付近です。奥に見える森は矢作神社です。

江戸時代が終わり、明治、大正時代に入ると町内には鉄道が開通し、輸送手段は、次第に人力から鉄道へと移行が変わって行きます。昭和に入り、国道1号が開通するころになると、矢作のまちは舟運の衰退、商工業への産業構造の転換が進んできました。そして戦後、高度経済成

長期の科学技術の発達により、私たちの暮らしは一層豊かになりました。豊かになるにつれ、神仏に祈る行為も薄れてきたように感じます。昭和の初めころにつくられた、頑強な堤防にまもられ、幸いなことに矢作のまちでは大災害が発生することは少なくなっています。

しかしながら、今でも矢作のまちの市街化はすすんでおり、どんどん農地は衰退減少し、宅地化されています。それに伴い、雨を一時的にためる都市のダム機能ともなる水田や、雨水の浸み込む畑なども、急速になくなってきました。加えて、近年の地球温暖化や台風の大型化、線状降水帯の発生、ゲリラ豪雨などの異常気象などにより、水

害の危険性は再び高まってきています。また100年周期でこの地に発生する東海・東南海地震の発生も近づきつつあります。先人の積み上げてきたまちの施設が、あたりまえのようにあり続けると錯覚しないように、これからも感謝を忘れず、矢作のまちで、山車と共に暮らし続けていきたいと思ひます。

## コラム

### 幻の資料!? 未完の町史! 『矢作町史稿本』

「矢作の山車の謎」を解く糸口は、山車が造られた江戸時代頃の矢作のまちと、それを取り巻く時代背景の把握には古文書の究明が必須と考え、色々な史料を探している中、それらをまとめた刊行前の原稿が奇跡的に残っていることが判りました。

「矢作町史稿本」という本で、昭和35年ごろ刊行予定であった旧矢作町史の本です。稿本の構成は、「1章：村の概要」、「2章：村民の負担」、「3章：村の経済」、「4章：山と水」、「5章：村の政治」、「6章：村の文化」に大別されています。内容は村方文書を提示し解説され、178点の古文書が書き下し文で採録されています。原文書が焼失した現在、矢作地区の近世を窺う貴重な資料になっています。残念ながら、発刊に至っていません。(岡崎市美術博物館所蔵)



# 矢作の山車を曳き続ける意義

## 「生き延びるための」山車文化

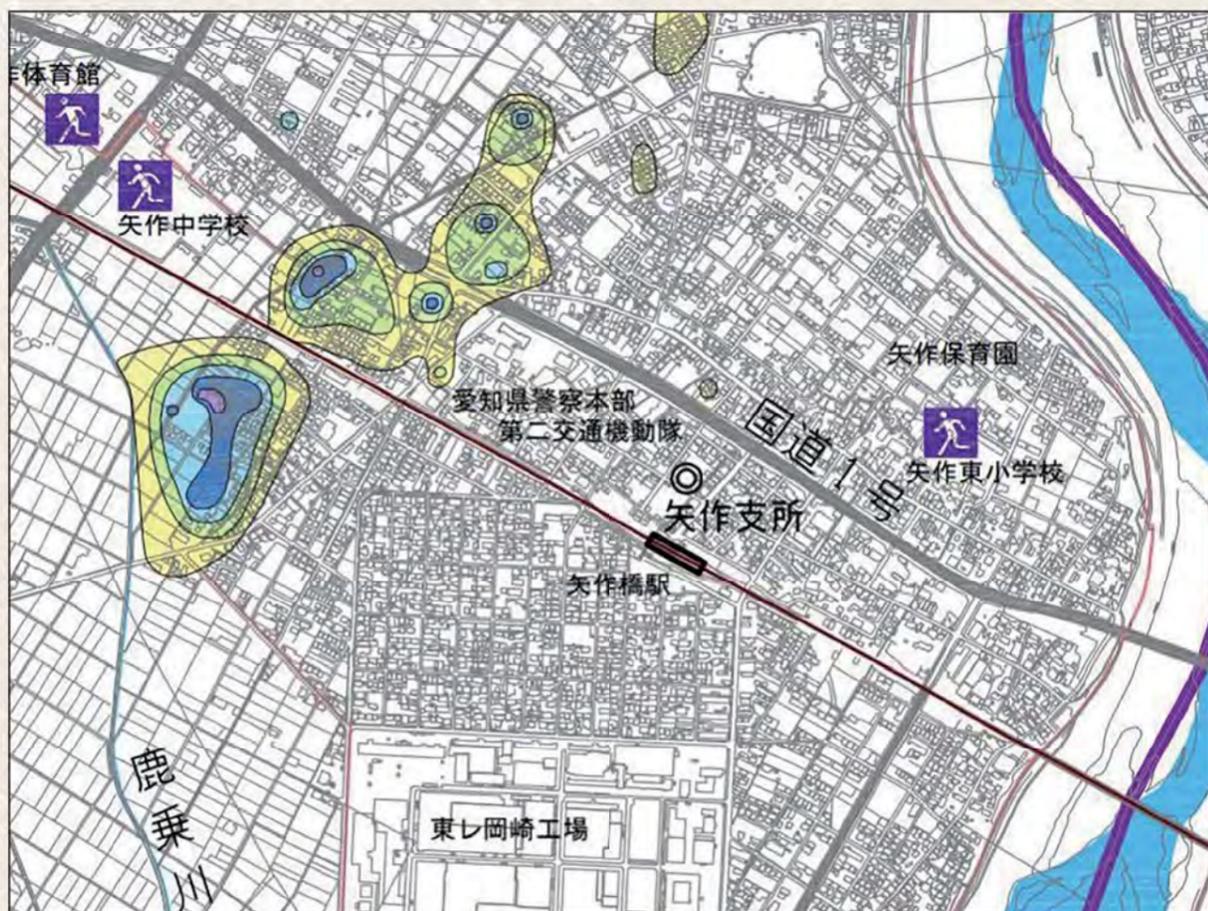
先に述べたように、昭和の初めころに矢作のまちを守る頑強な堤防が、建設・補強されてきたおかげで、江戸時代に発生した矢作川の堤防が切れるような大災害は現代までおきていません。しかしながら、近年、平成12年(2000年)9月の「東海豪雨」や「平成20年(2008年)8月末豪雨」などの他にも、内水氾濫がひんぱんに発生するようになりました。これは矢作のまちの宅地化が急速に進んだことによるものと考えら

れます。

(※平成12年「東海豪雨」の浸水地図参照)  
矢作川を管理する国は、この流域におよそ1000年に一度の確率で降る大雨によって、浸水が予想される範囲やその深さを示した地図を公表しました。そして次の点に役立ててほしいと言っています。

- お住まいの地域の洪水はん濫による浸水被害の可能性についての確認
- 水害に対する関心を高め、水害に強い生活様式の工夫

矢作のまちに暮らす私たちにとって、と



▲平成12年(2000年)9月「東海豪雨」により発生した浸水実績図 矢作支所管内(岡崎市)

てもショッキングな地図ですが、「今を生きる」私たちひとりひとりに、いざという時に「生きのびる」ための知識を身につけてほしい、というメッセージなのです。

【浸水深マップ】にかつて矢作のまちに発生した、大規模な堤防切れ「北野切れ」「天王堤切れ」の箇所を重ねました。(※図中の赤丸) 矢作川が大きく蛇行している箇所です。

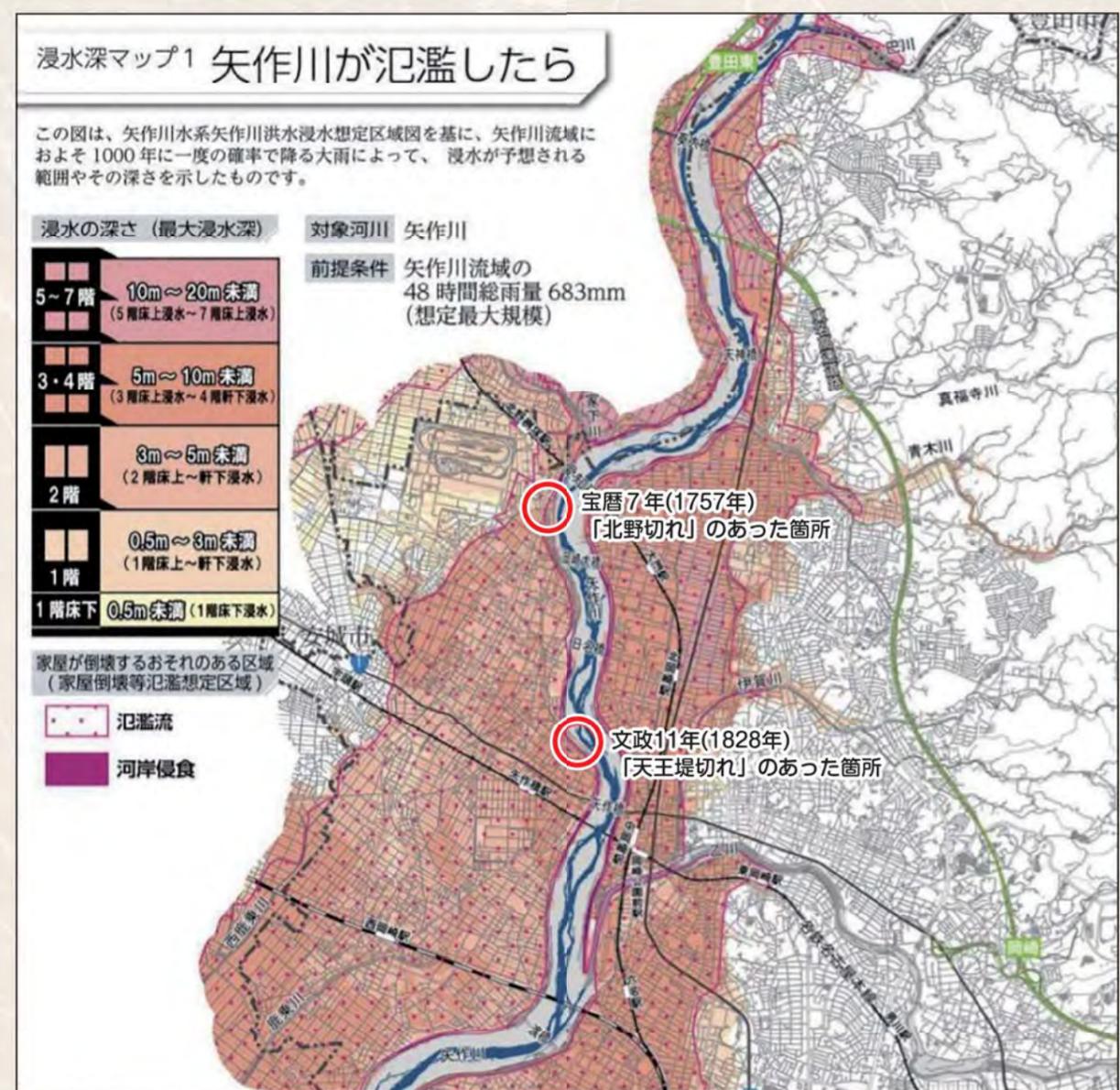
矢作のまちに大災害を起こした、文政11年(1828年)の「天王堤切

れ」から約200年が経過しようとしています。

(※「浸水深マップ」矢作川が氾濫したら参照)

まさに矢作のまちを守り続けてきた、「矢作川の堤防」と「矢作の山車」の歴史が重なります。

私たちはこの地で、この矢作のまちで、矢作の山車を後世まで曳き続ける理由はここにあるような気がしてなりません。



▲「浸水深マップ1矢作川が氾濫したら」(岡崎市水害対応ブック)に加筆



# 山車の保管

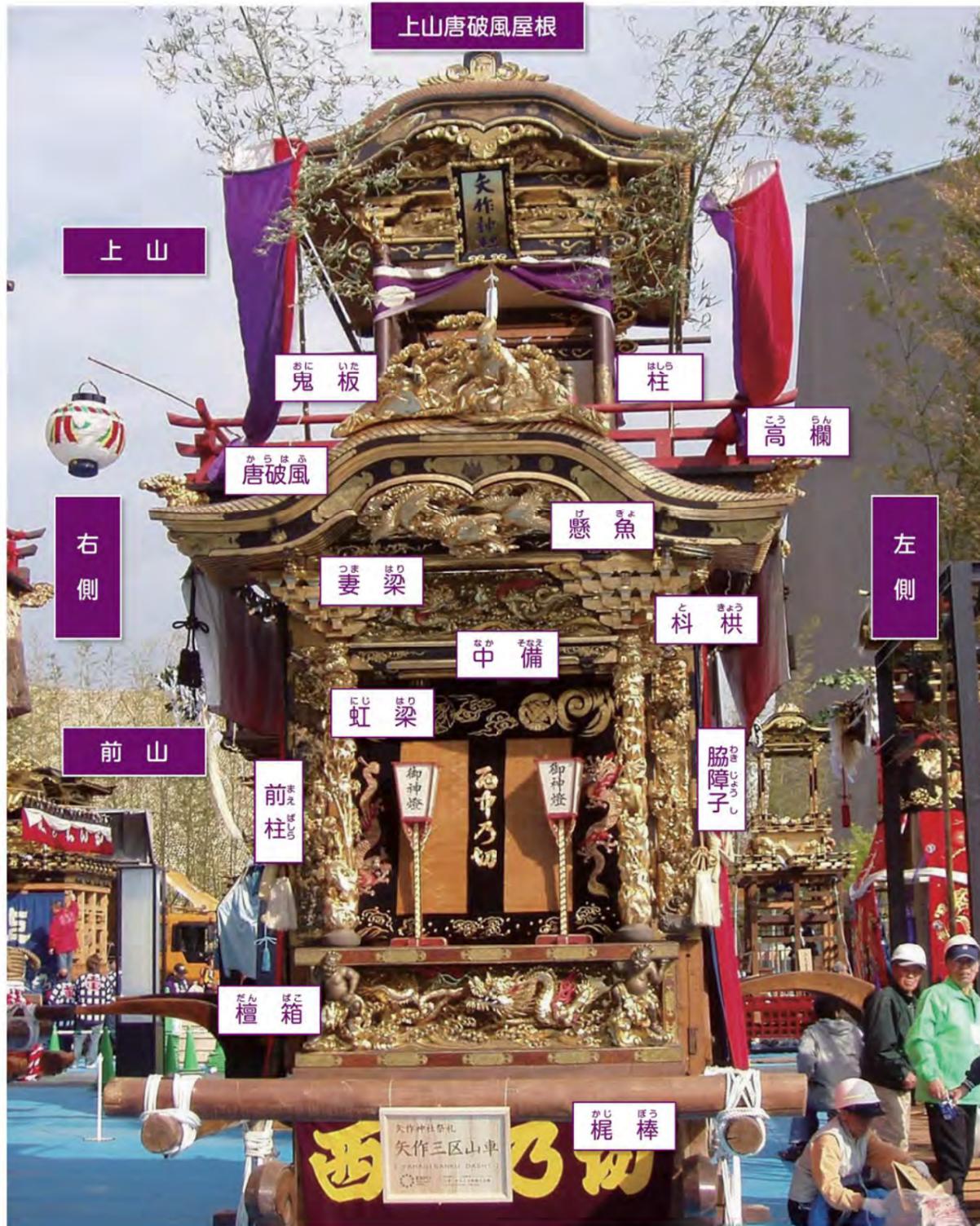
部位ごとに分ける / 保管方法



# 西中乃切山車 各部位ごとに解体

かつて山車は各部位ごとに解体し、  
祭礼時前に組み立てていました。平成26

年（2014年）に西中乃切の山車を解体し  
ました。その記録の一部を抜粋します。



※山車の右・左は山車の進行方向を基準とします。

## 鬼板

屋根の箱棟等木造棟の  
端を覆う装飾的な板の  
ことを言います。

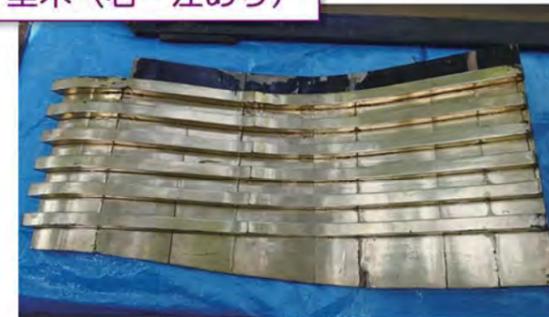


## 唐破風

日本特有の破風形式  
で、切妻屋根の先に  
曲線を連ねた形状の破  
風板が付けられます。



## 垂木 (右・左あり)



屋根を支える部材です。

## 懸魚



破風板の下に装飾を目的として付けられる  
彫刻を施した板のことです。



懸魚の奥にある切妻部分の彫刻のことです。



たるき 垂木受け部分 (棟木)

からばさ 唐破風

おひ 笈形

と 科 栱



科栱 (下部より)



科栱 (上部より)

吊り金具

はしら さいじょうぶ じくぶ うえ せつち のきけた さき ぶ い めいしょう  
柱の最上部や、軸部の上に設置され、軒桁を支える部位の名称です。



科栱吊り受け木

科栱・唐破風受け金具



科栱・唐破風受け金具



のきけた 軒桁 (右・左)

つま 妻 梁



妻梁 (中間部)



妻梁 (端部)

のきけた 軒桁



なか 中 備

にほんけんちく くみもの くみもの あいだ かくしゆけた う しじざい  
日本建築の組物と組物の間にあつて各種桁を受ける支持材のことです。



にし 虹 梁

はり いっしゆ やね かじゆう さき  
梁の一種で、そりがあり、屋根の荷重を支えています。

き 木 鼻



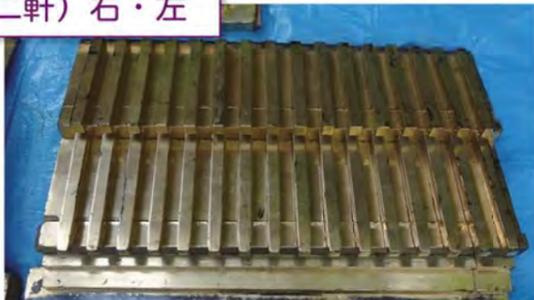
しやしちようこく きばな どうぶつけい しし そろ りゆう きりん ばく しょくぶつけい  
社寺彫刻の一つです。木鼻には動物系で獅子・象・龍・麒麟・猿・植物系などがあります。

こうてんじょう 格天井



き く こうしがた し あ てんじょう  
木を組んで格子形に仕上げた天井です。

のき 軒 (二軒) 右・左



かしらつな けた 頭繋ぎ (桁方向) 左右あり



かしらつな はりほうこう 頭繋ぎ (梁方向)



伊達柱 (後) 右・左あり

わきしょうじ 脇障子



だてはしら 伊達柱

伊達柱 (前) 右・左あり

きばな 木鼻

柱脚



だんばこ箱 檀箱

# にしなかのきれだしがど ほかんほうほう 西中乃切山車飾りの保管方法

## 【長持ちの中に収納】

- 鬼板 (楠公桜井の別れ)  
山車内の収納箱 上段 (同封 雪洞)
- 懸魚 (三羽の鶴)  
山車内の収納箱 下段 (同封 御幣)

## 【保管庫 中2階の保管箱に収納】

- 幕類
- 【幕保管箱の右 保管箱に収納】
- 提灯
- 神額：山車上段裏の箱に納めます。

## 《鬼板・懸魚の保管方法》

### 『鬼板』



### 『懸魚』



- 1 長持ちに綿をしきつめる。
- 2 しきつめた綿の上に彫刻をのせる。
- 3 綿を上からかぶせてふたを閉める。

## 《幕類の保管方法》

- 1 保管庫 中2階の保管箱に新聞紙を敷き並べます。



- 2 「青白幕」を折りたたみ収納します。その上に新聞紙を敷き並べます。



- 3 「大幕」の表を内側にして折りたたみ収納します。その上に新聞紙を敷き並べます。



- 4 「水引幕」の刺繍面を傷つけないように収納します。その上に新聞紙を敷き並べれば、収納完了です。



# 東中之切山車の保管方法

ひがしなかのきれ だし いちぶ ぶい はず  
東中之切の山車は一部の部位を外し、  
だしぐら ぼかん  
山車蔵で保管しています。

またしゃりん お  
また車輪は、ひびわれが起きないよう

しおみず げつ かい  
塩水につけ、1ヶ月に1回、まわして  
保管しています。



## 上山屋根



しゅうふく ひがしなかきれ もじ ぼどこ うえやまやね  
修復がされ、「東中切」文字も施された上山屋根

## 車輪



しおみず ぼかん  
塩水につけて保管しています。



出会い・絆、そして後世へ伝えたい想い  
 ~これからも受け継がれる山車~



わたしたちの住まちは、身も心も  
 奮い立たせるすばらしい「山車」が  
 あります。  
 山車祭は地域のひとたちが災厄防除を  
 願っておこなう山車曳行で、祭礼行事  
 です。祭礼にあたって地域のひとたち  
 が年間を通じ、山車曳行に向けた準備や  
 練習をおこなうことで、これらを通して

世代間の交流が盛んにおこなわれ、地域  
 コミュニティーの一端が形成されていま  
 す。この山車文化の復興・保存・継承は  
 将来の地域創生のために重要であり、  
 将来にわたってこの矢作の山車の魂を曳  
 いていってほしいと考えています。  
 以前から山車の運営・保存については  
 町内会で管理しておりましたが、山車の



存在を地域のひとたちに広めるため、平成22年(2010年)5月16日、「第1回山車曳行会議」が開催され役員13名で「山車保存会」が結成されました。その後の15年間、町内の回覧板や近隣への声かけで山車の存在や曳行を知ってもらい、現在では会員43名が在籍しています。山車を通じて町内会や山車保存会

を暖かく迎え入れていただいたたくさんの方々との新たな出会いにより、旧知のひととの「絆」も深まりました。山車保存会では毎年、役員会の定例会開催・全体会開催により、方向性を確認しながら山車曳行(2025年現在は隔年開催)の準備、山車のメンテナンスをおこなっています。

特に山車曳行の年には、山車保存会の3部門(保存部・総務部・広報部)が半年前から準備をはじめ、曳行日や曳行ルート、勇壮な山車の前で華を添える可愛い子どもたちの踊りの準備や、曳行者募集、自治体への申請許可など、着々と準備を進めています。山車保存会の今後の課題として、「未来

にいかにして伝えていくか」を考えています。町内のひとたちが祭りをみるだけでなく、山車のメンテナンス作業や曳行等に参加し、山車に触れることで興味をもつきっかけになることを確信し、そして堅く、難しい伝統継承ではなく、今を生きる子どもたちへのあざやかな感動体験となっ



この地に住むことを縁とした私たちが、  
これからも次の世代へと  
魂をひきついでいきたいと思ひます。



未来へバトンを繋いでもらいたい想いを抱いています。さらに、100年後もこのまちに山車とお祭りがあってよかったと思ってもらえる、そして見たくなる、誘いたくなる、参加して誇りやいきがいを感ぜられる活動をめざし、こどもたちにいかにして未来に伝承していくかを考えながら取り組んでいます。

この記念誌を手にとられた皆様方、世代交代を重ねても、山車は温かくわたしたちを見守ってくれます。一緒に山車を曳きましょう！  
また山車保存会では随時会員募集をしていますので、この機会に入会をおまちしております。どうぞ、よろしくお願ひいたします。  
山車保存会一同

# 編集後記

矢作の山車は、江戸後期に製作されてから200年ほどたちます。その間、数千人、数万人、十数万人という多くの人々の手によって山車の保存・伝承・曳行が行われてきました。しかし、決してすべてが順調に進んできた訳ではありません。過去には10年以上も山車曳行を行うことができなかったり、保存会が消滅してしまった時代もありました。それでも、この矢作の山車を愛し存続を願う人々によって大切に守られ、受け継がれてきました。現在の山車保存会が発足して15年ほどたち、現在では多くの会員が集まってくれています。それにより隔年での曳行が出来るようになり、また、山車の曳行に向けて揃いの長半纏の作製をしたことで、若い人からも注目してもらえるようになってきました。また、山車保存会を組織化し、いろいろな

役割を分担することにより、保存・修理・伝承・曳行が円滑に行われるようになってきています。しかし、まだまだ「矢作の山車」の知名度はあまり高くはありません。まずは地元であるこの矢作町の皆様に「私たちの矢作の山車」をより深く知っていただくために、この本を制作しました。幼稚園の小さなお子さんから小学生・中学生・高校生を初め、未来を担う現役の若者や、歴史を支えてくれたベテランの方々まで、多くの矢作町の方に、矢作の山車の素晴らしさを知っていただきたいと思っています。「矢作の山車」が、これから「岡崎の山車」、ひいては「愛知の山車」となって、よりたくさんの人々に愛されていくことを願っています。

矢作町三区山車保存会代表 金森誠也



## ◀ 上段 左より

野村 昭弘、太田 昭男、畔柳 悟、宮川 洋一

## 下段 左より

山田 学、金森 誠也、中竹 重信

#### 《出典・参考文献》

矢作史料編纂委員会「岡崎市史 矢作史料編」岡崎市 1961 / 石川松衛 編「矢作町誌」愛知県史蹟編纂会、碧海郡矢作町 1928  
石川松衛 編「矢作町誌 大正版 覆影版」岡崎地方史研究会 1997 / 新編岡崎市史編集委員会「新編 岡崎市史12巻民俗」岡崎市 1988  
新編岡崎市史編集委員会「新編 岡崎市史19巻史料民俗」岡崎市 1983 / 加茂久算 著「参河聡視録 矢作村記」江戸末期  
和田清美編著「矢作町界限記」WEBサイト (<http://dakiyo.web.fc2.com/>)  
水野耕嗣 編著・写真「尾州彫物師 瀬川治助 木彫りの世界」泉良 1999 / 矢作東学区作成委員会「岡崎まちものがたり34矢作東学区」岡崎市 2017  
星野美 著「矢作橋のたもと・その自然と心の広がり」星野美 1986 / 岡崎市防災課「岡崎市水害対応ハンドブック」岡崎市 2025

#### 《ご協力》

顧問 鋤柄欣宥様 / 顧問 若園勝輝様 / 矢作神社 宮司 川喜田隆司様 / 岐阜工業高等専門学校 名誉教授 水野耕嗣様  
岡崎市美術博物館 学芸員 湯谷省吾様 / 同 学芸員 安本翔音様

和田清美様 / 岩月玲子様 / 永田民子様 / 内田雄次様

岡崎地方史研究会 / 刈谷市郷土資料館 / 泉田郷土研究会 / 知立市教育委員会文化課 / 南知多町教育委員会  
岡崎市防災課 / 岡崎市下水道工事課 / 松應寺

# 矢作の山車

発行日：令和7年9月

発行責任者・編集責任者：矢作町山車保存会